

表25 脇本遺跡第4次調査出土遺物観察表(3)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼胎	調 成土	備考
32-2 61-2	須恵器	杯蓋	861127	口縁は中程でやや脹らみを持ちながら垂直に下る。天井部は浅く平らで器壁が厚い。口縁との境は鋭く断面三角形である。	外面は口縁～胴部ナデ。天井部ロクロナデ、時計回り。	灰色 良好 良好 白色微砂粒微量含む		
32-3 61-3				〃	杯蓋	861122	口縁部は垂直に下った後、端部で内傾し凹面を持つ。天井部はやや浅く口縁との境は鋭い。	外面上部はヘラケズリ。外面下部及び内面はナデ。
32-4 61-4	〃	杯蓋	861127	口縁は垂直に下り、端部は厚く水平気味。天井部は浅く扁平気味で器壁が厚い。口縁との境は丸く突出して鋭さがな。	口縁部は回転ナデ。外面上部は軽いヘラケズリ。内面上部は横ナデ。	内面及び断面：暗黄白色 外面：灰白色 良好 黒色微砂粒、白色微砂粒少量含む		
32-5 61-5				〃	杯蓋	861202	やや平坦な天井部からなめらかに円曲し、口縁端は薄くなって大きく開く。	外面上部はヘラケズリ。その他内面に至るまで回転ナデ。
32-6 61-6	〃	杯身	861119	口縁は傾いて立ち上り、端部は内傾し凹面をつくる。受部は水平に突出し丸くなって終る。体部は半球形で、底部は平坦気味で全体に凹凸がある。	外面口縁～胴部回転ナデ、底部ヘラケズリ。内面はヘラケズリ。	白橙色～淡灰色 良好 良好 白色砂粒、濃灰色砂粒少量含む		
32-7 -				〃	杯身	8C 861119	口縁内傾した後直立して立ち上り、端部で内傾し凹面を持つ。受部は外上方に突出し鋭さは持たない。体部は浅く扁平気味。	内面及び外面上部はナデ。外面の下部はヘラケズリ。
32-8 61-8	〃	杯身	861122	やや内傾して立ち上る口縁で、端部は丸く太く終る。受部は外上方に突出し鋭さは持たない。底部欠失。	内面及び外面上部はナデ。外面の下部はヘラケズリ。	外面：淡灰色 内面：淡黄灰色 良好 密		
32-9 61-9				〃	杯身	861122	ほぼ直立する口縁、端部で少し内傾し丸くなって終る。受部は外上方に突出し鋭さは持たない。体部は浅く底部はやや平坦気味。	内面及び外面上部はナデ。外面下部はヘラケズリ。
32-10 61-10	〃	杯身	4A 第4層最下層 861216	口縁は内傾して立ち上り、端部は太く尖り気味に終る。受部は水平に突出し丸味を持つ。体部は扁平気味。	内面及び外面上部はナデ。外面下部はヘラケズリ。	淡灰色 良好 白色砂粒微量、2mm大 白色小石粒2個含む		
32-11 61-11				〃	杯身	861211	内傾して立ち上り、端部は薄くなって終る短い口縁。受部はやや上向きに突出している。鋭さはない。	内面及び外面上部は回転ナデ。外面下部はヘラケズリ。
32-12 -	〃	杯身	5B 3層中層 861122	ごく短い口縁はやや内傾して、端部は尖り気味。受部は水平に太く突出している。体部は浅く平坦である。	内面及び外面上部はナデ。外面下部はヘラケズリ。	外面及び断面：灰色 内面：青灰色 良好 白色砂粒微量含む		底部にヘラじるしか
32-13 62-13				〃	杯身	3A 861225	底部は平坦で上げ底になっており、外向きの高台がつく。体部は底部から屈曲して外上方に伸びる。口縁端は尖くなって終る。	内面及び外面上部高台までは回転ナデ。底部は回転ヘラナデ。
32-14 62-14	〃	高杯	SC 861119	直立気味に外反する口縁は端部が薄くなって終る。体部に2つの凸体がある。底部は欠失している。	全体に回転ナデ。	外面：暗白色、黒緑色の釉の痕跡 内面及び断面：濃灰色 良好 白色微砂粒多量、白色砂粒微量に含む		
32-15 62-15				〃	高杯	中央3南 861111	脚部はなだらかに開き、端部は立ち上り面をつくり凹面がめぐる。	脚部は内・外面共に回転ナデ。体部内面はナデ。

第4節 脇本遺跡第5次調査（宮ノ本地区）

（1）はじめに

第5次調査は、第3・4次調査区の東に隣接する桜井市脇本字宮ノ本地区で実施した。調査面積は285㎡。

（2）層序

調査は東西14.5m、南北19mの調査区を設定して行った。まず耕作土（第1層 灰黒色土層）の下には第2層の橙褐色の床土が続き、第3層の暗褐色土層となる。この面ではまだ遺構は存在しないが、北壁の第24層（暗黒褐色土層）上面で素掘り溝を検出した。第24・29層（黄灰色砂質土層）の中には、須恵器、土師器片が含まれているが、この層は石敷き、石垣を構築する際の整地層と考えられる。土器片の時期は、5世紀から6世紀中葉のものが多い。このことから、石敷き、石垣の構築時期は6世紀後半以降と見られる。

第9層の暗褐色砂礫土層を除去すると、全体に暗褐色砂質土層（第14層）になる。この層の上面には溝や柱穴と見られる遺構があるが、石敷きの前身遺構と見られる。

調査区北面の西半部の土層では、第24層の上面が中世の遺構面で、第32層の上面が7世紀後半の遺構面と見られる。西面の土層では、第9層を切り込んだ柱穴掘形の一部がかかっているが、この面が7世紀後半の遺構面と見られる。

（3）検出遺構（図33・34、図版31～33）

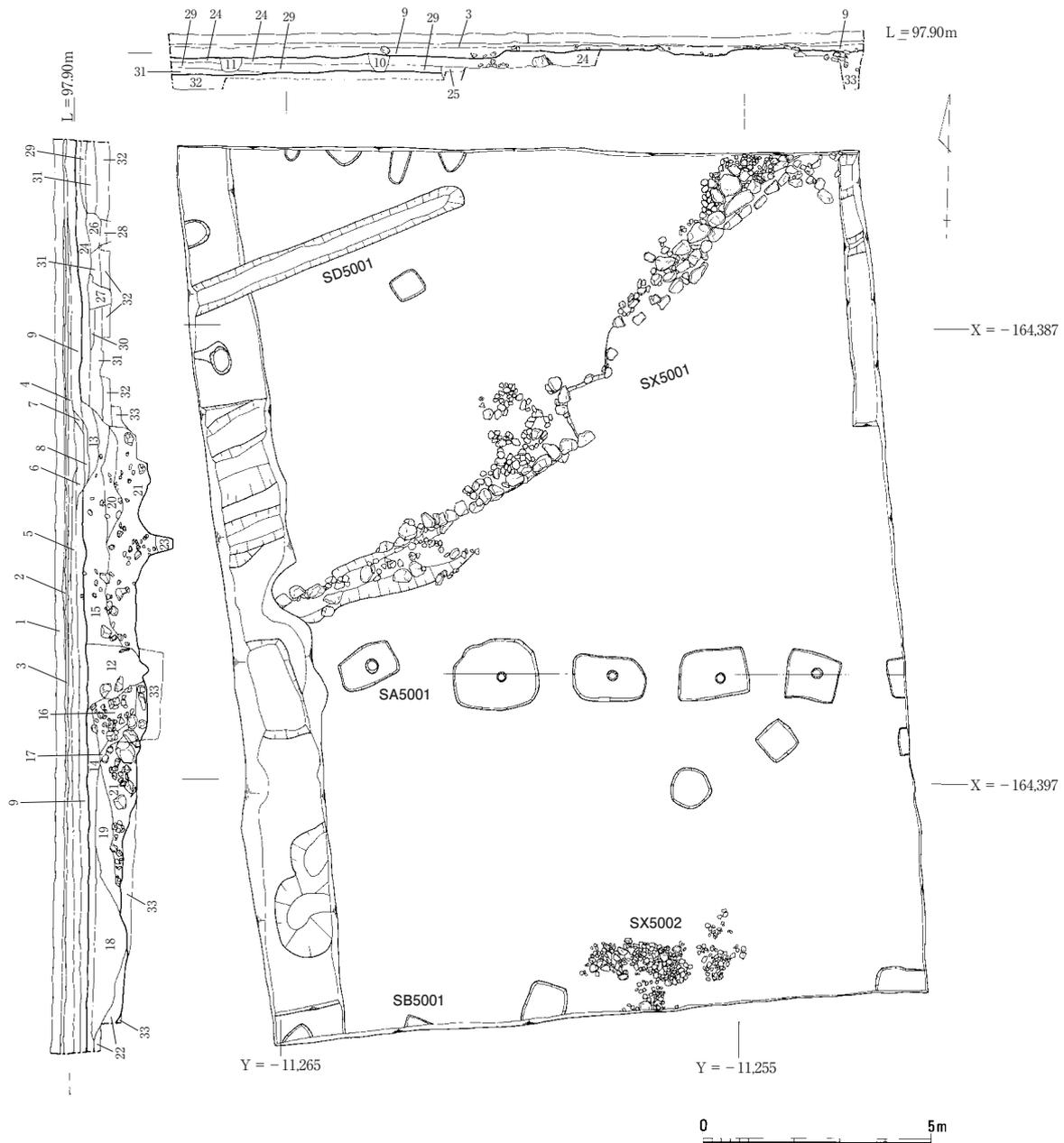
柵列 SA5001

調査区中央部で検出した東西方向の柵列で、柱穴掘形を7個確認した。柱間は約2.1mで六間分、12.6m。掘形の規模は一定でなく、方形の中に円形に近いものも含まれ、一辺1.0～1.5m。柱痕跡の残るものは、径約25cm。第3・4次調査区で検出した東西方向の柵列SA3001と一連のものと思われる。

石溝・敷石・石垣 SX5001

調査区北東部から西南方向に向かって、底石を敷いた、両側に一段の側石を持つ石溝が約5m検出された。方位は北38°西。石溝の幅は40cmで、人頭大の自然石を用いたもので、一部原状を保っているが、南側石の大部分は崩壊している。この石溝に関連するものに、敷石がある。径10cm前後の自然石を溝の北側に敷いたものであるが、現存するのは調査区内ではごくわずかな部分に限られる。この敷石の中に石溝に直交するように大型の石が北に向かって敷かれている。これはさらに調査区外へも続くと見られる。敷石の中に造られた通路のようなものであろうか。石溝の西端部は攪乱されていることもあり明確でないが、調査区東端から約5mのところまで終わり、不自然に南に折れ曲がり、石垣の東端に接続すると見られる。

石垣は大型の自然石の面をそろえて積み上げたのが2～3段残る。敷石の上面やこの石垣の上面に散乱する小礫の状態から見て、当初からさほど高さは変わっていないと見られる。石垣の南には、幅約2mでほぼ並行しながら小礫層が続いている。この礫層は前身遺構の埋土の上面に当たるが、この



- | | |
|---|--------------------------------|
| 1 灰黒色土層 (耕作土) | 17 暗黄灰色砂層 |
| 2 灰色砂質土層 | 18 暗黒褐色土層 (整地土) |
| 3 茶褐色土層 (床土) | 19 暗褐色土層 (礫が少ないが、整地土である) |
| 4 暗褐色土層 | 20 暗灰色混礫砂層 (5世紀後半) |
| 5 黄灰褐色土層 | 21 暗褐色混礫砂質土層 (粗い砂混り。5世紀後半の整地土) |
| 6 暗灰色砂礫層 | 22 暗褐色砂質土層 |
| 7 暗灰色砂質土層 | 23 暗灰色細砂層 (暗渠) |
| 8 暗茶灰色砂質土層 | 24 暗黒褐色土層 |
| 9 暗黒褐色・黒褐色・灰褐色土層 (西壁)、
淡灰褐色土層 (北壁) | 25 黒色土層 |
| 10 黒色土層 (柱穴) | 26 黒色土層 (柱穴掘形) |
| 11 暗灰色土層 (柱穴) | 27 黒色土層 (溝) |
| 12 灰黒色混礫土層 (柱穴掘形) | 28 暗黄灰色砂質土層 (柱穴) |
| 13 暗灰褐色土層 | 29 暗黄灰褐色土層 (西壁)、黄灰色砂質土層 (北壁) |
| 14 暗灰色砂質土層 | 30 暗黄灰色砂質土層 |
| 15 灰黒色混礫土層 (石垣築造に際して埋められた土。
6世紀後半~末の土器を多く含む) | 31 暗黄灰褐色砂質土層 |
| 16 暗褐色混礫砂層 | 32 灰黒色砂質土層 |
| | 33 暗黄灰色細砂層 |

図33 脇本遺跡第5次調査 第1~3期 平面・断面図 (1/150)

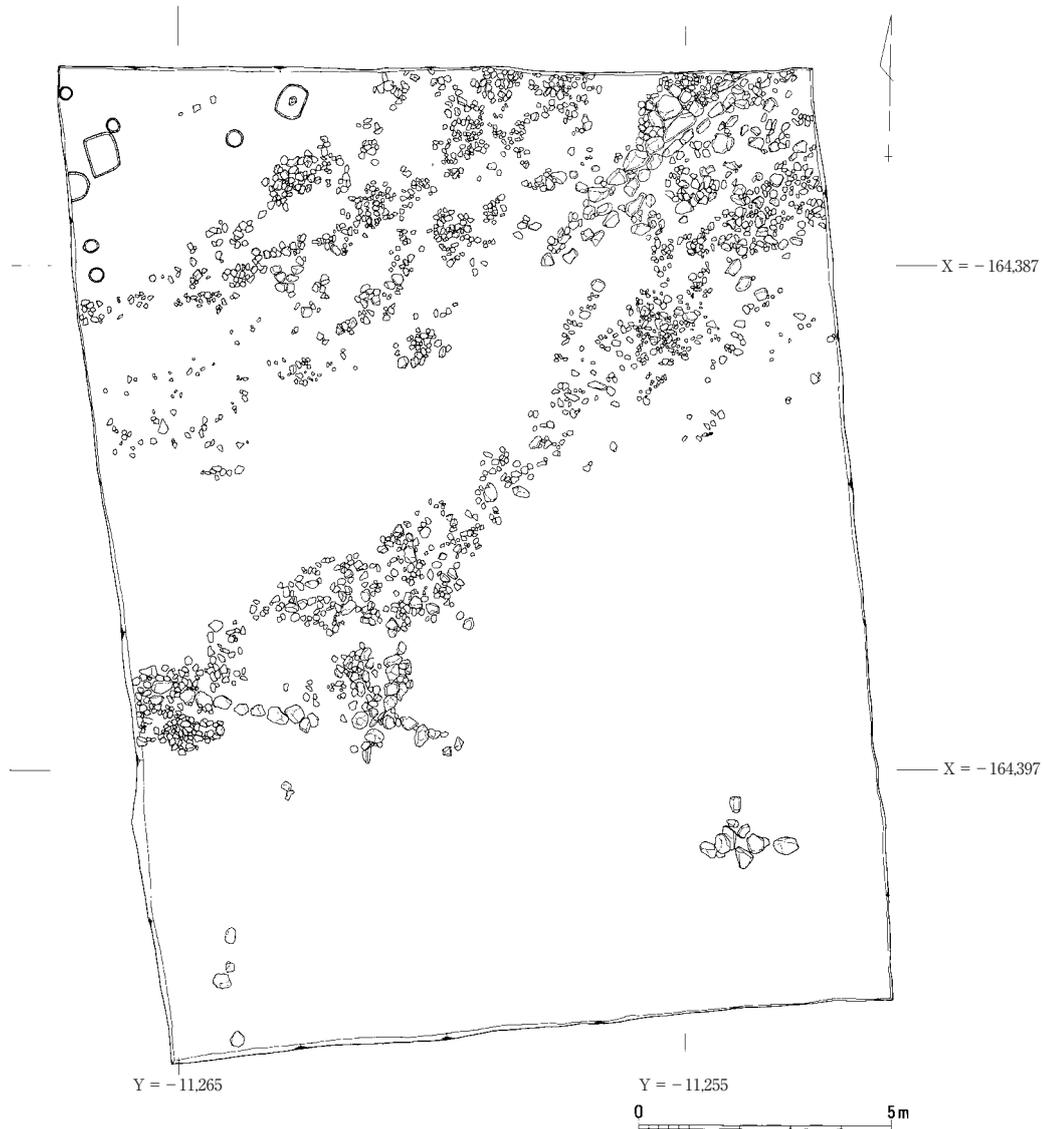


図34 脇本遺跡第5次調査 第4期 平面図 (1/150)

石垣が機能していた時期に、水路としての役割を果たしていた可能性がある。

石垣、石溝、敷石を築くために造成工事を行っており、その埋土の中から6世紀後半の土器片が多く出土することから、この一連の遺構はそれを遡ることはない。また石溝が崩壊したあとの土層内から7世紀後半の土器片が出土していることや、柵列SA5001は層位的に見て崩壊後に造られたと見られることから、この一連の遺構は、比較的早い時期に機能を終えた遺構と言えよう。

素掘り溝 SD5001

幅約60cm、深さ約45cmの東西方向の溝。調査区西端から東に約7m検出。石垣にほぼ並行しているが、石垣、敷石、石溝群の下層から検出したことから、前身遺構に伴うものと見られる。

掘立柱建物 SB5001

調査区南端で柱穴掘形の一部が東西に3個列んでいる。建物は南にのびると見られるが柱間は約2.8m。この柱穴は、5世紀代の整地土層上面に造られていることから、大規模な整地後間もなくの建物

と見て良からう。全体の規模は不明。

土器群 SX5002

調査区南端の中央付近で、東西約3m、南北2m足らずの範囲に、布留式土師器片、礫に混じって5世紀代の須恵器片などが集中して見られる。層位からみて、大規模な整地に際して一括投棄、もしくは意図的に埋め込んだものかも知れない。

整地土層 (図33)

調査区の東北端から西壁の中央部に向かう自然地形の落ち込みがあり(旧河道の可能性はある)、そこに大小の礫、砂を投入し、上層は土で固めている状況が明らかになった。西壁に沿って幅1.5mのトレンチを設定し観察した結果、この砂礫層は幅約10m、最も深いところで約1.2mをはかり、部分的には人為的に掘ったと見られる溝も検出した。出土遺物から見て5世紀後半の地業といえる。さらにこの砂礫層の中央部は、石垣を築くにあたって6世紀後半に再度溝状に掘り込み。地業を行っていることが明らかになった。

(4) 出土遺物 (図35～41、表26～33、図版63～72)

E7・8区の土器群(SX5002)からは、57個の土師器と1個の須恵器が図化できた(図35～37)。その中で複合口縁壺1、広口口縁2～6・13・14の7点、くの字口縁壺15点、S字口縁甕が3点、高杯は33～44の12点ある。45～57までは、壺、甕の底部である。須恵器も含まれており、下限は5世紀中葉ころか。必ずしも一時期のものとは言えず、庄内、布留式期にわたっての日常雑器が認められる。場所的に見て、7世紀代に造られたSA5001の南側に位置し、石礫を多く含む点、この地域の5世紀中葉前後に行われた、大規模な整地に対して一括投棄、もしくは意図的に埋め込まれた過去の遺物であった可能性もある。

大土木事業SX5001は、石溝、敷石、石垣などからなっており、北東から南西に調査区を横断する。E-2・3区の溝内出土品には、布留2式期の土師器が出土するが、石列の裏込めと見られる石礫群の中からは、図38-12の宇田甕が1個体見つかり、6世紀中葉段階のものか。須恵器類も、図40-6・7・12～14の5点が図化できたが、6世紀中葉期の特徴を見せる。さらにSX5001の上層には図40-8・9が出土している。6世紀末～7世紀前半期の特徴を持つ。7世紀前半にはSX5001は埋め戻されている。

SA5001は、ほぼ東西に一直線に並んでおり、第3次調査で確認した東西柵列につながると考えられる。柵列掘形内は未発掘で、時期を明示できる遺物の検出は出来なかった。しかし、SA5001がSX5001の埋め戻しの後に造られたと見れば、7世紀前半以降(飛鳥時代)と考えることができる。

(5) 小結

この調査区での成果をまとめておこう。まず第3次調査区で検出した東西方向の柵列(SA5001)の続きが、東延長線上で六間分が確認され、さらに東に延びる可能性が強いことが明らかになったことである。なお第3次調査区の東端の柱穴から、本調査区の西端の柱穴まで、約10mの空白地帯がある。未調査区もあるためその幅は狭まる可能性はあるが、少なくとも第3次調査区の約6m、三間分は空

白となる。柵列の間にあった出入口の可能性も考えられよう。これは7世紀後半から8世紀初めの遺構である。

二番目の成果は、石溝、敷石、石垣が検出されたことで、これらは6世紀後半から末葉に造られたもので、第3・4次調査区で検出した総柱建物（SB4002）はこの施設と一連のものとの可能性がある。敷石の状況や地形からみて、これに伴う主要な建物はさらに北方に存在すると考えられる。

5世紀後半の遺構は顕著なものは検出されていないが、調査区南端で一部認められる。第1・2次調査でも確認していたことであるが、この調査区でも大規模な整地土層が認められ、5世紀後半にこのあたり一帯で大造成工事がなされたことが確実にされた。（前園）

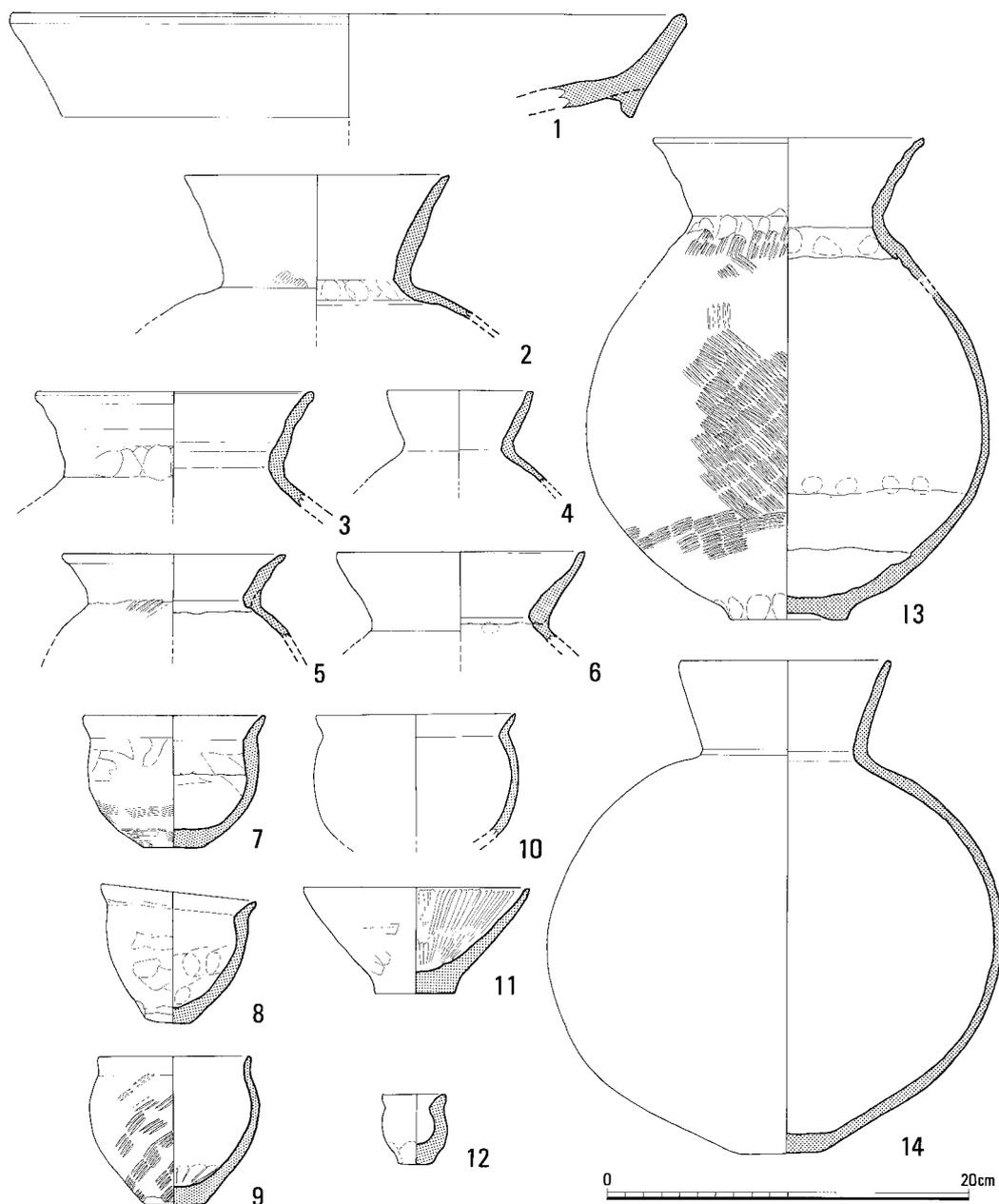


図35 脇本遺跡第5次調査出土遺物（1）（1／4）

1～14：E-7・8土器群

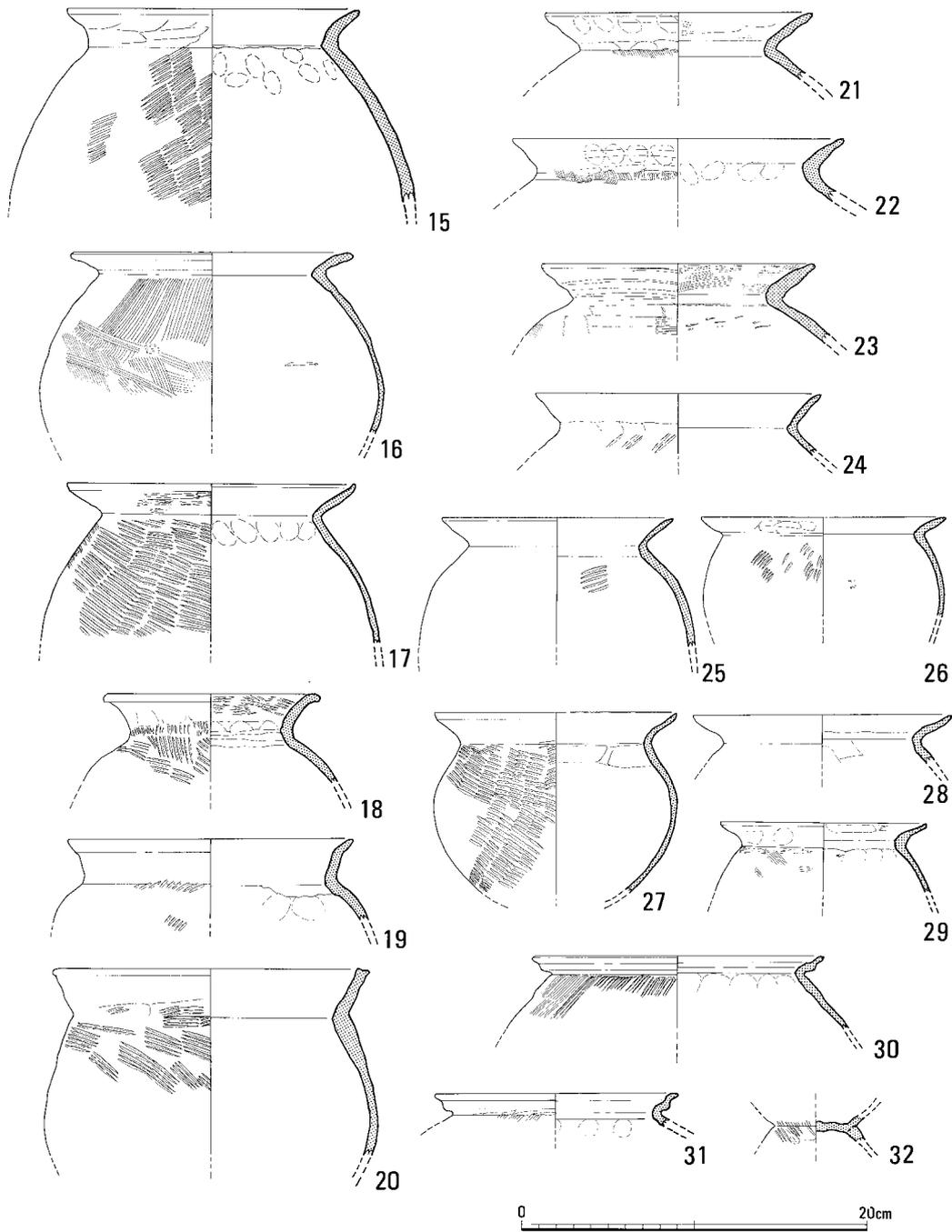


図36 脇本遺跡第5次調査出土遺物(2) (1/4)
 15~21・23・24・26・27・30: E-7・8土器群 22・25・28・29・31・32: E-8土器群

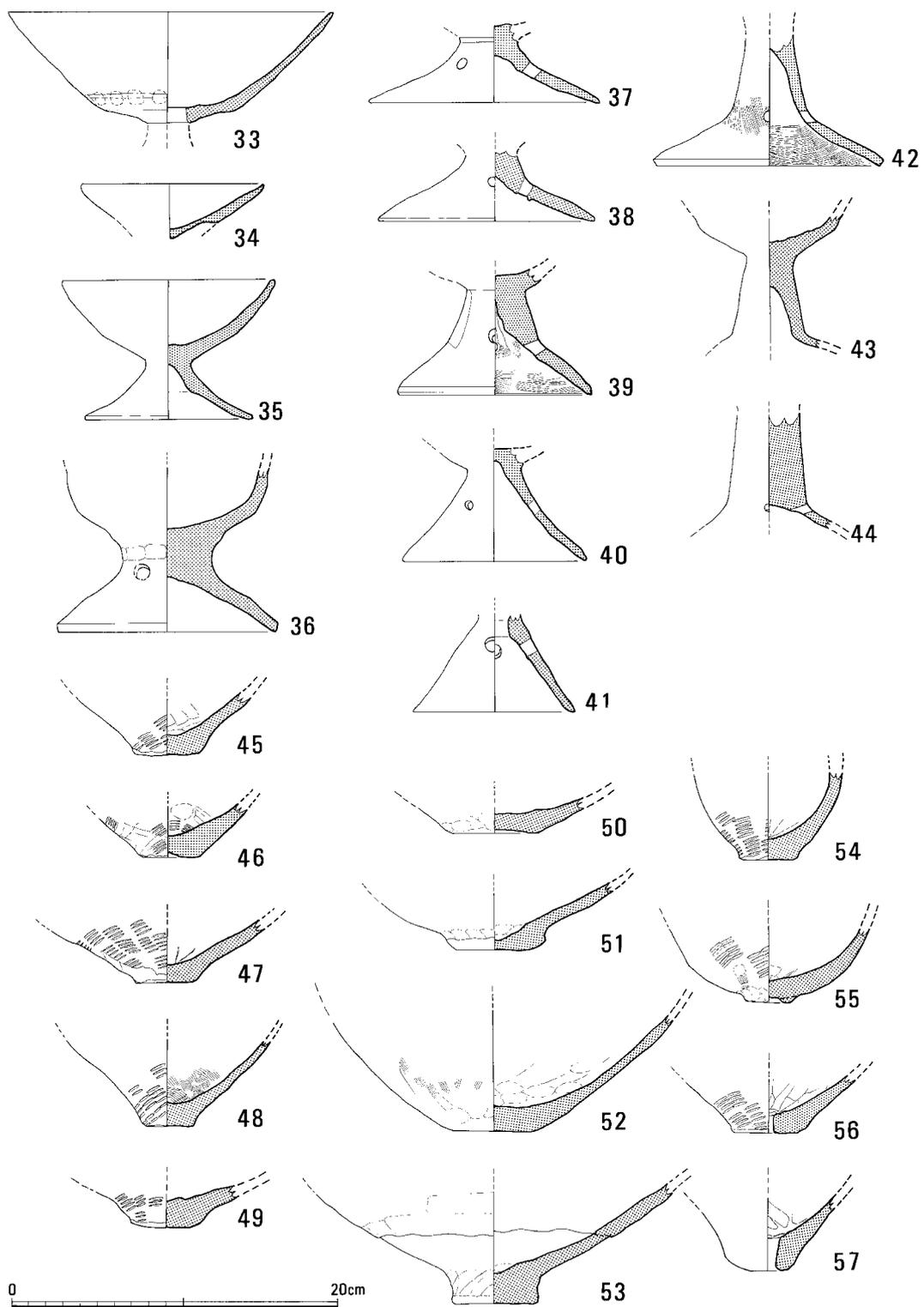


图37 脇本遺跡第5次調査出土遺物 (3) (1/4)

33~57: E-7・8土器群

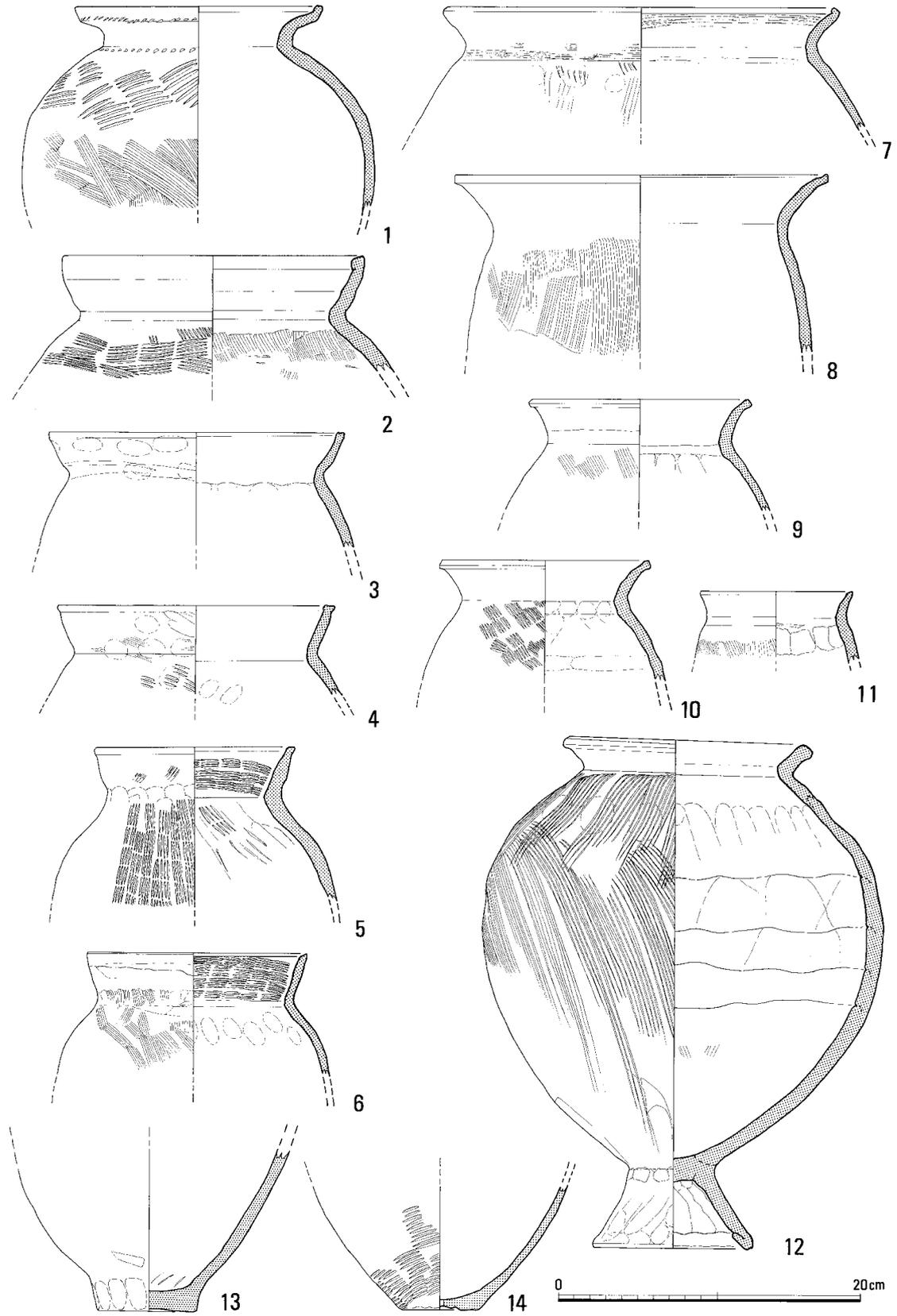


图38 脇本遺跡第5次調査出土遺物(4) (1/4)

1: B-2 2: C-2 3·4·14: E-7 5: E-3 6·12: B-3 7·8: E-2 9: D-2
10·11: D-3 13: D-6

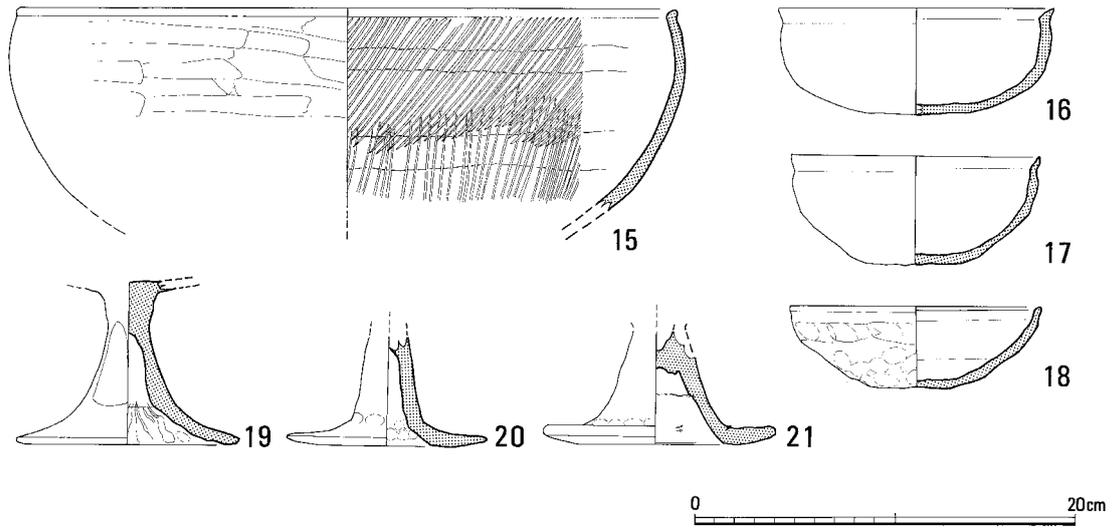


図39 脇本遺跡第5次調査出土遺物(5) (1/4)

15: F-4 16・17: D-2 18: C-6 19: F-5 20: C-4 21: D-2

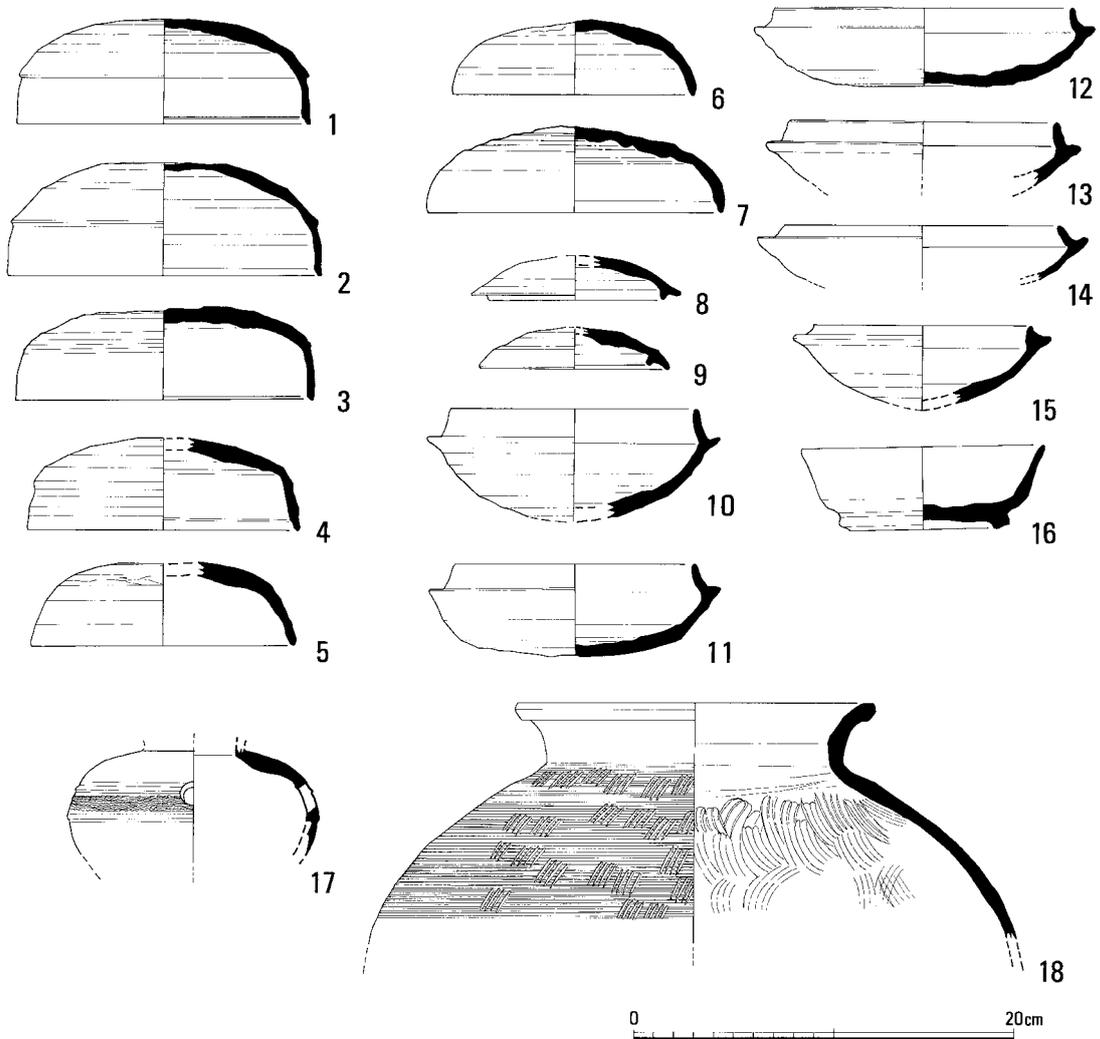


図40 脇本遺跡第5次調査出土遺物(6) (1/4)

1: E-7・8土器群 2: 第6区拡張区 3: E-7 4: F-3 5: 春日神社境内表採 6: D-3
 7: B-4 8・15: F-4 9: D-5 10・11: D-6 12: D-4 13・14・18: B-4
 16: D-7・E-3 17: F-5

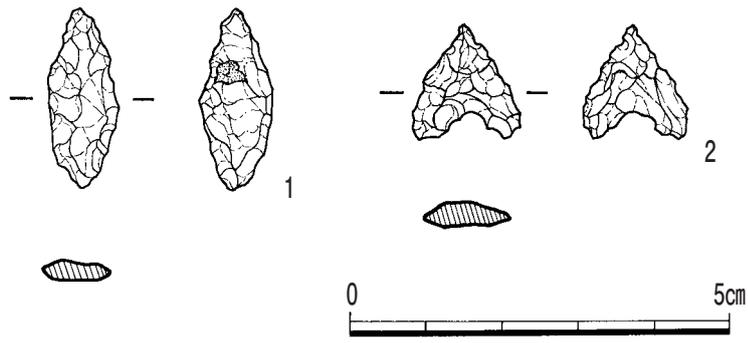


図41 脇本遺跡第5次調査出土遺物 (7) (1/1)

1 : 第1遺構面 2 : B-5

表26 脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(1)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼 胎	調 成 土	備考
35-1 63-1	土師器	壺 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	大きく開いた二重口縁。口縁が屈曲する部分の下方方向に突起を持つ。	横ナデ調整。	淡黄褐色～黄褐色 良好 3mmの小石、細粒(雲母・赤色粒)を少し含む		
35-2 63-2	〃	壺 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	やや長めの口縁は、外方にまっすぐ伸び、中央部で少し脹らみを持ち、先端は薄く細くなって終る。肩の張った体部を持つと思われる。	磨滅している。 外面は頸部にハケメ痕。内面は頸部に指頭圧痕。	赤褐色 良好 1～5mmの小石、砂粒を含む		
35-3 63-3	〃	壺 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	口縁は中央部でゆるく屈曲をみせながら外反して伸び、端部は丸くなって終る。	磨滅している。 外面は頸部に指頭圧痕。内面は体部タタキ痕。	白黄褐色 良好 1～2mmの小石、砂粒を含む		
35-4 63-4	〃	壺 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	口縁は外方にまっすぐ伸び、端部は丸くなって終る。小ぶりの壺。	磨滅のため不明。	淡黄灰色 軟質 2～3mmの小石、砂粒を多量に含む		
35-5 63-5	〃	壺 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	口縁はやや脹らみを持ちながら外方に伸び、端部は丸く終る。	外面は口縁部ナデ、頸部にはタタキが残る。内面はナデ、接合痕がある。	淡黄褐色 良好 2mmの小石、砂粒(雲母・赤色粒)を含む		
35-6 63-6	〃	壺 (口縁)	E-7 土器群 880324	口縁は外方にまっすぐ伸び、先端部は内側に内傾面を持つ。	磨滅している。 内面は頸部に指頭圧痕、接合痕がある。	外：暗黄褐色 内：黄褐色 良好 微砂粒をわずかに含む		
35-7 63-7	〃	小型 甕	E-7・8 土器群 880406	外方に直立する短い口縁。平底でやや扁平な、小型の甕。	外面は口縁部横ナデ、体部はハケメ。内面はナデ。	淡褐色 良好 0.5～1mmの小石、砂粒を少し含む		
35-8 63-8	〃	小型 甕	E-7・8 土器群 880408	外方に直立する短い口縁。体部は脹らみを持たない。バランスの悪い小型の甕。	外面口縁部横ナデ、体部にタタキ痕がある。内面は指ナデ、指頭圧痕がある。	淡褐色 良好 0.5～3mmの小石、砂粒を多く含む		
35-9 63-9	〃	小型 甕	E-7・8 土器群 880406	直立する短い口縁。体部は丸く脹らみを持つ。全体的に器壁が薄い。小型の甕。	外面の口縁部は横ナデ、体部にタタキ。内面の口縁部は横ナデ、体部指ナデ、底部に指頭圧痕がある。	外：淡褐色 内：黒色 良好 1～1.5mmの小石、砂粒(雲母)を含む		
35-10 63-10	〃	小型 鉢	E-7・8 土器群 880408	外方に直立する口縁、先端部は薄く尖り気味に終る。体部は丸く脹らみを持つ。小型の鉢。	磨滅している。 外面にタタキ痕がある。	外：黄褐色 内：橙褐色 やや軟質 2mmの小石、砂粒を含む。		
35-11 64-11	〃	小型 鉢	E-7・8 土器群 880408	安定感のある底部から、なめらかに伸び、口縁は薄くやや丸みをおびて終る。小型の鉢。	外面はナデ。 内面はヘラミガキ。	淡赤褐色～黒灰褐色 良好 1mmの小石、砂粒を少し含む		
35-12 64-12	〃	ミニ チュア 壺	E-7・8 土器群 880408	極小型の短頸壺。	指ナデ。	淡黄褐色 良好 0.5～1mmの小石、砂粒を含む		
35-13 64-13	〃	壺	E-7・8 土器群 880408	外反して伸びる口縁は、中央部と端部で屈曲を持ち、先端部は丸くなって終る。肩は張らず、腹部やや下方で大きく脹らむ。底部は上げ底になっている。全体的に器壁が薄い。	外面の口縁部は磨滅している。頸部～体部にタタキ、底部に指頭圧痕がある。内面は磨滅している。指頭圧痕、接合痕がある。	淡黄褐色 軟質 2mmの小石、砂粒(雲母・赤色粒・黒色粒)を多量に含む		
35-14 64-14	〃	壺	E-7・8 土器群 880408	外方に直立する口縁は、先端部が丸くなって終る。大きく腹の脹らむ体部を持つ。	磨滅により不明。	赤褐色 良好 良好(密)		
36-15 64-15	〃	甕	E-7・8 土器群 880406	短く外反する口縁は、中央部で屈曲し、短部は尖り気味に終る。	外面の口縁部はナデ、体部にタタキ。内面はナデ、頸部に指頭圧痕がある。	淡黄褐色～黒褐色 良好 2mmの小石、砂粒を多量に含む。		

表27 脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(2)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼 胎	調 成 土	備考
36-16 64-16	土師器	甕	E-7・8 土器群 880408	短い口縁は、大きく外反し、端部は丸く厚みを持って終る。腹部は丸く脹らむ。全体的に器壁が薄い。	外面の口縁部はハケメ後に横ナデ、体部に乱調ハケメ。内面の口縁部は横ナデ。	淡褐色～淡灰色 良好 1～2mmの小石、砂粒(石英・赤色粒)を含む		
36-17 65-17				〃	E-7・8 土器群 880324	口縁はくの字形に外反し、先端部をつまみ上げている。全体的に器壁が薄い。	外面の口縁部はハケメ後に横ナデ、体部にタタキ。内面はナデ。	淡褐色～暗褐色 良好 砂粒(赤色粒・黒色粒)を含む。
36-18 65-18	〃	甕 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	口縁は頸部で屈曲を持ち、外反して伸びる。先端部は丸く面をつくる。	外面の口縁部はタタキ後に横ナデ、体部にタタキ。内面の口縁部はタタキ痕と指頭圧痕がある。体部は横ナデ。	淡黄褐色 やや軟質 2mmの小石、砂粒を多く含む		
36-19 65-19	〃	甕 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	やや直立気味の口縁は、上方で屈曲し外反する。先端部は薄く尖り気味。	外面の口縁部は横ナデ、体部はタタキ後に横ナデ。内面は横ナデ。	淡黄褐色 良好 微砂粒(雲母・赤色粒)を少し含む		
36-20 65-20	〃	甕	E-7・8 土器群 880406 E-8 土器群 880324	口縁は外方にまっすぐ伸び、先端に凹面を持つ。体部はあまり脹らまない様子。	外面の口縁部は横ナデ、体部は磨減しているがタタキ痕がある。内面は磨減していて不明。	外:暗赤褐色 内:口縁部:灰褐色 体部:黒灰色 良好 0.15～2.5mmの小石、砂粒(雲母・石英)を多量に含む		
36-21 65-21	〃	甕 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	くの字形の口縁、端部は丸みを持って終る。	外面は横ナデ。頸部にハケメ痕、指頭圧痕がある。内面は横ナデ。口縁にハケメ痕がある。	淡褐色 良好 砂粒を少し含む		
36-22 65-22	〃	甕 (口縁)	E-8 土器群 880324	くの字形の短い口縁、端部は薄くなり、丸く終る。	外面の口縁部は横ナデ、指頭圧痕がある。頸部にハケメ痕がある。内面は磨減している。頸部に指頭圧痕がある。	淡黄褐色 良好 2～3mmの小石、砂粒(雲母)を多く含む		
36-23 65-23	〃	甕 (口縁)	E-7・8 土器群 880406	くの字形の短い口縁、先端は薄く丸くなって終る。	ハケメ調整。内面体部にタタキ痕がある。	暗橙褐色～橙褐色 良好 2mmの小石、細砂粒を少し含む		
36-24 65-24	〃	甕 (口縁)	E-7・8 土器群 880408	くの字形に外反する口縁、先端部は尖り気味。器壁が薄い。	磨減している。外面体部にタタキ痕がある。	外:淡白褐色 内:暗灰褐色 良好 1mmの小石、砂粒を少し含む		
36-25 65-25	〃	甕	E-8 土器群 880409	くの字形の口縁は頸部と先端部が細く薄くなっている。全体的に器壁が薄い。	磨減している。内面にタタキ痕がある。	外:淡灰黄褐色 内:灰褐色 良好 1～1.5mmの小石、砂粒を少し含む		
36-26 65-26	〃	甕	E-7・8 土器群 880408	大きく開く短い口縁、先端部は厚く尖り気味に終る。体部はあまり脹らみを持たず、器壁が薄い。	外面は口縁部ナデ、ヘラ痕がある。体部はタタキ。内面はナデ。	褐色～赤褐色 良好 1mmの小石を含む		
36-27 65-27	〃	甕	E-7・8 土器群 880406	外反して伸びる口縁は中央部で屈曲し、先端部に面をつくる。全体に器壁は薄く、小ぶりの甕。	外面の口縁部は横ナデ。体部はタタキ。内面の口縁部は横ナデ。体部ナデ。	白灰色～淡灰褐色 良好 1～2mmの小石、砂粒(雲母)を少し含む		
36-28 65-28	〃	甕 (口縁)	E-8 土器群 880324	大きく開く口縁は屈曲をみせながら外反して伸び、先端部は薄く尖り気味に終る。	磨減している。内面に指頭圧痕がある。	暗褐色 やや軟質 2mmの小石、砂粒を含む		
36-29	〃	甕 (口縁)	E-8 土器群 880324	短く外反する口縁は、中央部で屈曲を持ち、先端部は薄く丸くなって終る。	外面の口縁は横ナデ、指頭圧痕がある。体部はハケメ。内面の口縁はナデ、ハケメ痕がある。	外:黒褐色 内:暗褐色 良好 2mmの小石、砂粒を少し含む		

表28 脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(3)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼 胎	調 成 土	備 考
36-30 70-30	土師器	甕 (口縁)	E-7・8 土器群 880406	S字状の短い口縁。器壁は薄い。	外面の口縁はナデ、体部はあらいナナメハケメ。内面の口縁はナデ、頸部に指頭圧痕あり。	白色 良好 砂粒(石英・雲母・赤色粒)を含む		
36-31 70-31								
36-32 65-32	〃	甕 (台部)	E-8 土器群 880324	S字状口縁を持つ土器の台部と思われる。	外面の体部はナナメハケメ、台部にタタキメ。内面は台部に指頭圧痕。	淡黄褐色 良好 1mmの小石、砂粒(雲母・石英)を含む		
37-33 66-33								
37-34 66-34	〃	高杯 (杯部)	E-7・8 土器群 880406	浅く小ぶりの杯部。	磨滅により不明。	黄褐色 良好 良好(密)		
37-35 66-35								
37-36 66-36	〃	高杯	E-7・8 土器群 880408	口縁部欠失。短い脚は中実で裾端部にゆるい面をつくる。透し孔がある。	磨滅している。(ヘラミガキか?) 外面にヘラ痕がある。	褐色 良好 2～5mmの小石、砂粒を含む		
37-37 66-37								
37-38 66-38	〃	高杯 (脚部)	E-7・8 土器群 880408	短く、扁平な脚。裾部先端は薄くなって終る。三方透し孔がある。	磨滅している。(ヘラミガキか?)	外：褐色 内：黒灰色 良好 良好(密)		
37-39 66-39								
37-40 66-40	〃	高杯 (脚部)	E-7・8 土器群 880408	中空の筒部は裾部へスラリと伸びる。裾部先端は薄く尖って終る。三方透し孔がある。	磨滅している(ヘラミガキか?)	淡桃褐色 良好 良好		
37-41 66-41								
37-42 66-42	〃	高杯 (脚部)	E-7・8 土器群 880408	スラリと伸びる脚。裾部は大きく広がり、先端部は面をつくる。透し孔がある。	外面はタテハケメ。内面はヨコハケメ。	淡褐色 良好 良好(密)		
37-43 67-43								
37-44 67-44	〃	高杯 (筒部)	E-7・8 土器群 880408	太い柱状の筒部、三方透し孔がある。	磨滅により不明。	黄褐色 良好 1.5～2mmの小石、砂粒を含む		
37-45 67-45								
37-46 67-46	〃	甕 (底部)	E-7・8 土器群 880408	底面中央が小さくへこんでいる。	乱調タタキ。	赤褐色 良好 2mmの小石、砂粒を多量に含む		

表29 脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(4)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼 胎	調 成 土	備考
37-47 67-47	土師器	甕 (底部)	E-7・8 土器群 880406	小さく突出した底部。	外面はタタキ。 内面は磨滅している。 ヘラ痕がある。	暗茶褐色～黒褐色 良好 3mmの小石、砂粒(石 英・雲母・赤色粒・黒 色粒)を含む		
37-48 67-48								〃
37-49 67-49	〃	甕 (底部)	E-7・8 土器群 880408	小さく突出した底部。底面が丸く、 やや不安定である。	外面はタタキ。 内面は不明。	淡灰褐色～暗褐色 良好 6mmの小石、砂粒(石 英)を含む		
37-50 67-50								〃
37-51 67-51	〃	壺 (底部)	E-7・8 土器群 880408	丸く突出した底部。	磨滅している。指頭痕 がある。	赤褐色～黒灰色 良好 5mmの小石、砂粒(石 英・雲母)を多量に含 む		
37-52 67-52								〃
37-53 68-53	〃	壺 (底部)	E-7・8 土器群 880408	小さく突出した、安定感のある底 部。体部は大きく脹らむ様子。	外面の体部はヘラナ デ、接合痕がある。底 部は指頭ナデ。内面は ナデ。底面に指頭圧痕 がある。	淡灰褐色 良好 1.5～2mmの小石、砂粒 を含む		
37-54 68-54								〃
37-55 68-55	〃	甕 (底部)	E-7・8 土器群 880408	ごく小さく突出し、底面がへこん でいる。	外面はタタキ。下部に ハケメ。指頭圧痕があ る。内面はヘラナデ。	外：淡褐色 内：淡灰褐色 良好 砂粒(雲母)を少し含 む		
37-56 68-56								〃
37-57 68-57	〃	甕 (底部) (甑)	E-7・8 土器群 880408	やや不安定な底部。中央に孔があり、 甑として使用されていたと思われ る。	磨滅している。内面に ヘラ痕がある。	褐色～黒灰色 良好 4mmの小石、砂粒(雲 母)を多く含む		
38-1 68-1								〃
38-2 68-2	〃	甕 (口縁)	C-2 第6層 880319	二段に脹らみを持ちながら立ちあ がる口縁。口縁部は内傾し内側 に肥厚して面をつくる。	外面の口縁部は横ナ デ、体部にタタキ。内 面の口縁部は横ナデ、 体部にハケメ。	黄褐色 良好 2.5mの小石、砂粒を多 く含む。		
38-3 68-3								〃

表30 脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(5)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼胎	調 成土	備考
38-4 70-4	土師器	甕 (口縁)	E-7 円形焼土坑 880408	口縁はやや外方にまっすぐ伸び、 天頂部に凹面を持つ。	外面の口縁部は横ナ デ、ハケメ、指頭圧痕 がある。体部はタタ キ、指頭圧痕がある。 内面は指頭圧痕があ る。	外：赤褐色～黒褐色 内：白灰褐色 良好 1～2mmの小石、砂粒 (雲母)を含む		
38-5 68-5	〃	甕	E-3 溝内 (砂礫層) 880405	口縁はやや外方にまっすぐ伸び、 先端部は丸く平坦に終る。	タタキ調整。口縁部外 面はタタキの後に横ナ デ。	黄褐色～桃褐色 断面：桃色 やや軟質 1mmの小石を含む		
38-6 68-6	〃	甕	B-3 第6層 (石敷) 880305	直立する口縁。先端部で内傾面を つくる。	外面の頸部は乱調ハケ メ。口縁に接合痕があ る。内面の口縁部はタ タキ。肩部に指頭圧痕 がある。	淡黄褐色～黒褐色 良好 2mmの小石、砂粒(雲 母・石英)を含む		
38-7 69-7	〃	甕 (口縁)	E-2 石溝崩壊後埋土 880404	広く大きく開く口縁は、先端部で 外傾した面を持つ。大型の甕。	外面の口縁部はハケメ 後ナデ。体部ハケメ、 頸部下方にタタキ、指 頭圧痕あり。内面の口 縁部はあらい横ハケ メ、体部は磨滅してい る。	白黄色～暗黄色 良好 良好(密)		
38-8 69-8	〃	甕	E-2 石溝崩壊後埋土 880404	外反して伸びる口縁、端部で面を つくり、先端部はつまみ上げられて 終る。体部は脹らみを持たない。	外面の口縁部はナデ。 体部にハケメ。内面は ナデ。	淡黄褐色 良好 良好(密)		
38-9 70-9	〃	甕 (口縁)	D-2 第5層 (礫層) 880322	くの字に外反する口縁。	外面の口縁部は横ナ デ、体部にハケメ。内 面の口縁部は横ナデ、 体部に指頭ナデ。	褐色 良好 2mmの小石、砂粒を多 量に含む。		
38-10 70-10	〃	甕	D-3 第5層 (礫層) 880322	くの字に外反する口縁。	外面の口縁部は横ナ デ、体部にタタキ。内 面の口縁部は横ナデ、 頸部に指頭ナデ、体部 ヘラナデ。	明褐色～灰褐色 良好 3mmの小石、砂粒(石 英・雲母・赤色粒)を 多量に含む		
38-11 70-11	〃	甕	D-3 第5層 (礫層) 880322	やや外方に向けて直立する口縁、 先端部はやや薄くなって終る。小 ぶりの甕。	外面の口縁部は横ナ デ、体部にハケメ。内 面の口縁部は横ナデ、 肩部にヘラ痕がある。	淡褐色 良好 0.5～1mmの小石、砂粒 を含む		
38-12 69-12	〃	甕 (宇田型)	B-3 第5層 石垣埋地 880401	宇田型甕。短く外反した口縁(S字 の退化)。腹部は大きく丸く脹ら む。裾の広がった高台を持つ。裾 部先端は内側に巻き上げられて終 る。	外面の口縁部は横ナ デ、体部は大きなナ メハケメ。肩部に指頭 圧痕が残る。内面の口 縁部は横ナデ、肩部に 指頭ナデ、中央部は板 ナデ、下部にハケメ痕 がある。接合痕があ る。台部は指ナデ。	淡黄褐色～暗黄褐色 良好 砂粒(長石・雲母)を 多く含む		
38-13 69-13	〃	甕 (底部)	D-6 第7層 880308	安定感のある突出した底部。底面 はやや上げ底になっている。	磨滅している。外面に 指頭圧痕、内面にヘラ 痕がある。	淡黄灰色 良好 1～2.5mmの小石、砂粒 を多く含む		
38-14 69-14	〃	甕 (底部) (甌)	E-7 円形焼土坑 880409	安定感のある底部。中央に孔があり、 甌として使用されていたと思わ れる。	外面はタタキ。 内面はナデ。	淡黄褐色 良好 砂粒(黒色粒)を含む		
39-15 70-15	〃	杯	F-4 サブトレンチ 第6層 (礫層) 880404	大きく開いた口縁は先端部で内側 に内傾面をつくる。大きな杯。	外面は横ヘラミガキ。 内面は横ヘラミガキ後 に暗文。	橙褐色 良好 良好		
39-16 70-16	〃	杯	D-2 第5層 (礫層) 880322	口縁は内側に内傾面をつくる。や や扁平な杯。	磨滅していて不明。	淡黄褐色 良好 2.0mmの小石、砂粒(石 英)を含む		
39-17 70-17	〃	杯	D-2 第5層 (礫層) 880302	短く外反する口縁は内側に内傾面 をつくる。ややいびつな造形の杯。	磨滅により不明。	淡黄褐色 良好 良好(密)		

表31 脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(6)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼 胎	調 成 土	備 考
39-18 70-18	土師器	杯	C-6 第6層 淡灰色粘質土 880226	口縁はごく短く、先端は内側に内傾面をつくる。凹凸の多いいびつな杯。	指ナデ。	淡赤褐色 良好 2mmの小石、砂粒を含む		
39-19 70-19			高杯 (脚部)	F-5 第6層 880302	中実の筒部からスラリと伸びる脚、裾部は大きく開き、先端部は丸く終る。	外面はナデ。内面は裾部に指頭圧痕、シボリ。	淡黄褐色 良好 良好(密)	
39-20 70-20	〃	高杯 (脚部)	C-4 第5層 (礫層) 880322	裾部が反り上った、やや小ぶりの脚。	磨滅している。指頭圧痕が残る。	黄褐色 良好 砂粒を少量含む		
39-21 70-21	〃	高杯 (脚部)	D-2 第5層 (石垣の整地) 880409	中実の筒部、裾部は屈曲し、反り上っている、やや小ぶりの脚。	外面は裾部に横ナデ、指頭圧痕がある。内面は横ナデ。	褐色～暗褐色 良好 2～3mmの小石、砂粒を含む		
40-1 71-1	須恵器	杯蓋	E-7・8 土器群 880406	口縁はほぼ垂直に下り、先端では鋭く内傾し、凹面を持つ。天井部はやや扁平気味で、口縁部との境は小さく突出し、鋭さを持たない。	外面は口縁～中央部が回転ナデ、天井部にヘラケズリ。内面は回転ナデ。	青灰色 良好 砂粒を含む		
40-2 71-2			〃	第6区 拡張区 第4～5層 880308	口縁はほぼ垂直に下り、端部は内傾面を持つ。天井部は深みを持ち、口縁部との境は小さく丸みをおびた三角形に突出する。全体的に器壁が薄い。	外面は口縁～中央部が回転ナデ、天井部にヘラケズリ。内面は回転ナデ。	外：青灰色～暗青灰色 内：白青灰色 断面：桃色 良好 1～2mmの小石、砂粒(黒色粒)を含む	
40-3 71-3	〃	杯蓋	E-7 円形焼土坑 880409	口縁はほぼ垂直に下り、端部はやや内傾する。天井部は扁平で、ややいびつ。口縁との境は目立たない。	外面は口縁～中央部が回転ナデ、天井部にヘラケズリ。天頂部は未調整のまま。内面は回転ナデ。	青灰色 良好 砂粒を含む		
40-4 71-4	〃	杯蓋	F-3 第7層 石敷上面 880308	扁平な天井部から円曲して口縁部へと下る。口縁端は薄く丸くなって終る。浅く小ぶりの蓋。	外面は口縁～中央部が回転ナデ、天井部にヘラケズリ。内面は回転ナデ。	青灰色～暗青灰色 良好 1～1.5mmの小石、砂粒を含む		
40-5 71-5	〃	杯蓋	春日神社境内 表採 880403	口縁はやや脹らみを持ちながら、ほぼ垂直に下り、端部は細く薄くなり、内面に沈線をめぐらせる。扁平な蓋。	外面は口縁～中央部が回転ナデ、天井部にヘラケズリ。内面は回転ナデ。	外：暗青灰色 内：青白色 良好 やや粗。 2mmの小石、砂粒を多く含む		
40-6 71-6	〃	杯蓋	D-3 第6層 石敷上面 880308	口縁は天井部からなだらかに円曲して下り、端部は丸く尖り気味に終る。浅く小型の蓋で、左右対称のいびつな造形。	外面は口縁～中央部が回転ナデ、天井部にヘラケズリ。内面は回転ナデ、天井部に横ナデ。	青灰色 良好 2mmの小石・砂粒を含む		
40-7 71-7	〃	杯蓋	B-4 サブトレンチ 第7層 (礫層・石垣盛 土中) 880329	がたつきのある天井部から、円曲して下りる口縁。端部は丸く尖り気味に終る。浅く小型の蓋で、いびつな造形。	外面は口縁～中央部が回転ナデ、天井部にヘラケズリ。天頂部は未調整。内面は回転ナデ。	淡灰色 良好 1～3mmの小石、砂粒(黒色粒)を含む		
40-8 71-8	〃	蓋	F-4 サブトレンチ 第6層 (礫層) 880404	浅く扁平な小型の蓋。	回転ナデ調整。	淡青灰色 良好 1～2mm小石、砂粒を含む		
40-9 71-9	〃	蓋	D-5 礫層上面 880331	浅く扁平な小型の蓋。	回転ナデ調整。	淡青灰色 良好 良好		
40-10 71-10	〃	杯身	D-6 第7層 石組近く 880308	立ち上りは内傾しながら伸び、端部は丸くなって終る。受部は水平方向に伸び、鋭さはない。体部は丸く深みを持つ。	外面の口縁は回転ナデ、体部～底部にヘラケズリ。内面は回転ナデ	淡白灰色 良好 良好(密)		

表32 脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(7)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼胎	調 成土	備考
40-11 71-11	〃	杯身	D-6 880331	立ち上りは内傾しながら伸び、端部は丸くなって終る。受部は水平方向に突出し、鋭さはない。やや浅めで扁平な杯。	外面の口縁部は回転ナデ、体部は自然釉がかかっている為に不明。内面は回転ナデ。	淡青灰色 良好 砂粒を含む		自然釉がかかる
40-12 71-12	〃	杯身	D-4 第5層 (礫層) G880323	立ち上りは内傾して短く伸び、端部は丸く終る。受部は水平方向に突出し、鋭さはない。浅く扁平な杯。	外面の口縁～体部は回転ナデ、底部にヘラケズリ。内面は回転ナデ。	青灰色 良好 良好(密)		
40-13 70-13	須恵器	杯身	B-4 サブトレンチ 第7層 (礫層・石垣盛 土中) 880329	やや内傾して短く伸び、端部は丸くなって終る。受部は水平方向に突出し、丸味を持つ。底部は欠失している。	回転ナデ調整。	灰色～暗灰色 良好 砂粒を含む		
40-14 70-14	〃	杯身	B-4 第6層 (石垣の整地) 880323	立ち上りは内傾して短く伸び、端部は丸みを持って終る。受部は水平方向に突出し、鋭さはない。底部は欠失しているが、浅めの器形と思われる。器壁は薄め。	回転ナデ調整。	外面：暗灰色 内面：乳灰色 良好 良好(密)		自然釉がかかる
40-15 72-15	〃	杯身	F-4 サブトレンチ 第6層 (礫層) 880404	ごく短い立ち上り。受部は水平方向に突出し、鋭さはない。小ぶりの杯。	外面の口縁～体部は回転ナデ、底部にヘラケズリ。内面は回転ナデ	青灰色 良好 良好 微砂粒を含む		
40-16 72-16	〃	杯身	D-7 第7層 黄灰色粘質土 880305 E-3 第6層 石溝上面 880304	平坦な底部には外向の小さな高台が付く。体部は底部から屈曲して外上方に伸び、口縁端部はやや薄く、丸みを持って終る。	外面は回転ナデ。 内面は回転ナデ。 底面はヘラケズリ	白灰色 良好 良好(密)		D-7・6層とE-3・7層のものが接合している
40-17 72-17	〃	應 (体部)	F-5 第5層 880225	扁平気味の肩の張った体部。肩部に波状文があり、その上・下に沈線がめぐる。口縁・底部は欠失している。	回転ナデ調整。 外面肩部に波状文。	白灰色 良好 2～4mmの石、砂粒を多く含む		
40-18 72-18	〃	壺	B-4 第6層 (石垣の整地) 880323	短い頸部は口縁部で外反し、端部で丸く肥厚して面を作る。体部は大きく脹らみを持つ。腹部以下は欠失。内面には青海波文が施されている。	外面の口縁部はナデ、体部はカキメの上にタタキ。内面は青海波文(やや磨滅気味)。	青灰色 良好 良好 微細砂を含む		

表33 脇本遺跡第5次調査出土遺物観察表(8)

図番号 図版番号	器種	出土地	法量	備考
41-1 69-1	石鏃	第1遺構面 880219	全長2.4m、幅0.95m、厚0.3m	
41-2 69-2	石鏃	B-5 第8層 (暗灰褐色土) 880328	全長1.55m、幅1.45m、厚0.3m	

第5節 脇本遺跡第6次調査（宮ノ本地区）

（1）はじめに

脇本遺跡第6次調査は、第5次調査区の北に隣接する脇本字宮ノ本地区で実施した。

ここは今までの調査区の中で最も北側に位置し、さらに春日神社に近いこともあって、当初から遺構の存在が充分予想される場所であった。調査面積は約300㎡。

（2）層序

この調査区は、春日神社に道路を隔てて南接しており、他の調査区より一段高い位置にある。そのため表土の灰色粘土層（第1層）と第2・3層の暗灰色粘土層、黄褐色・暗黄褐色土層約40～50㎡を取り除くと、遺構面が現れる。

（3）検出遺構（図42・43、図版34～38）

調査区は、東西15m、南北は西壁で21m、東壁は13mの変則的な形である。調査区内で検出した遺構は、掘立柱建物5棟、竪穴建物5棟、溝3条である。

掘立柱建物 SB6001

調査区西南部の下層で検出した南北二間（3.6m）、東西二間（1.8m以上）の東西棟。

掘立柱建物 SB6002

調査区の西端部に一部かかる南北二間（4.6m）、東西一間（2.1m）以上の東西棟。竪穴住居SI6005に切られていることから、下限は6世紀前半である。

掘立柱建物 SB6003

調査区の西北隅にかかる南北三間（6.5m）以上、東西一間（3.0m）以上の建物。掘立柱建物SB6002と重複しているが、一辺約60㎡のやや小形の柱穴掘形や方位の共通性などから、さほど時期の変わらないと見られる。

掘立柱建物 SB6004

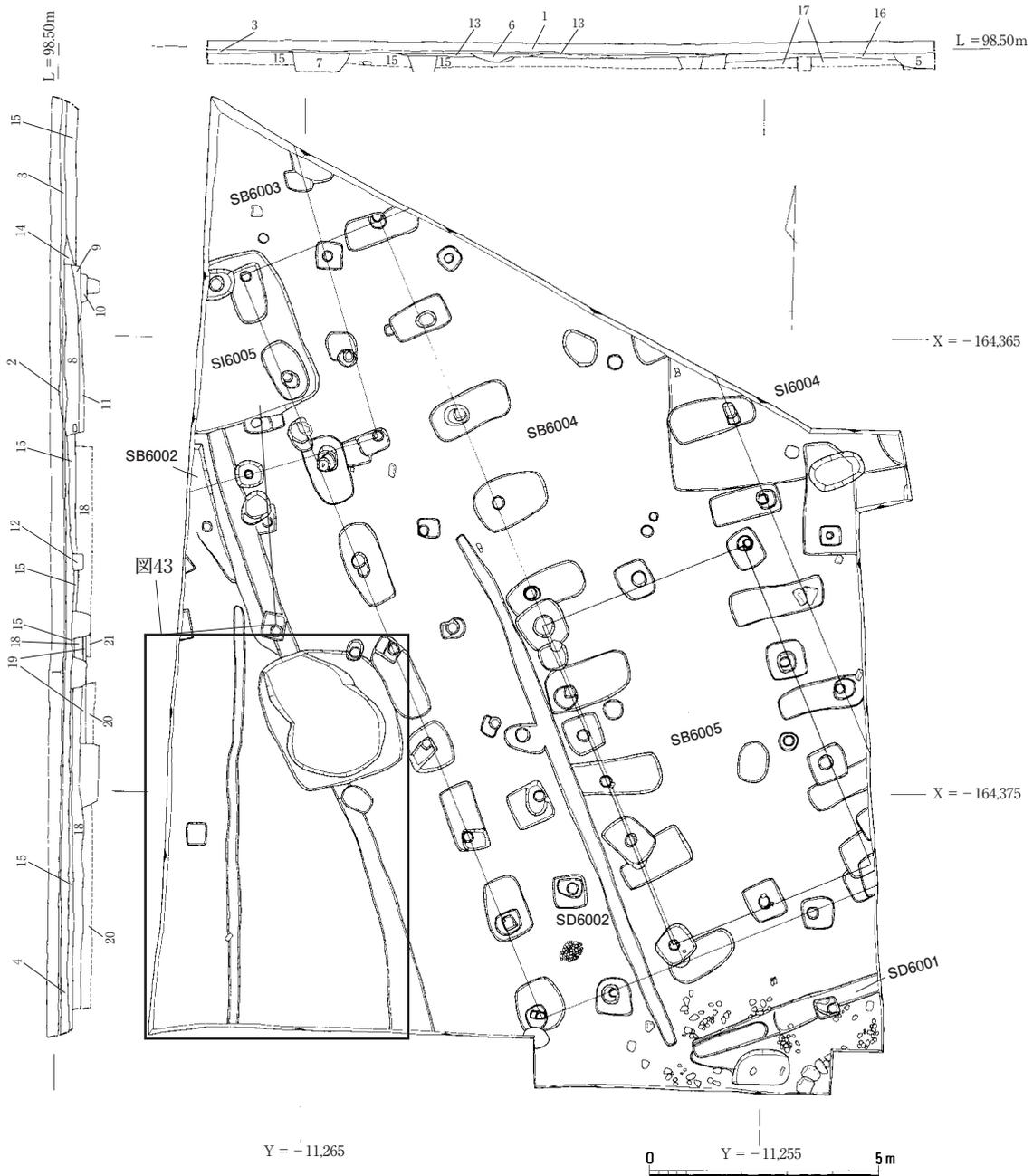
ほぼ調査区全面におよぶ南北八間（17.5m）の建物。母屋と考えられる部分は一間（5.4m）しか確認できていないが、西側に3.3mの庇が付く。もし、この調査区内で完結するのであれば、母屋が一間×八間（5.4×17.5m）で、西側に庇の付く片面庇建物で、東西8.7m、南北17.5mの南北棟とみられる。主軸は北から約20°西に振っている。しかし、さらに東に延びるのであれば、構造、規模ともに大きく異なってくる。

掘立柱建物 SB6005

SB6004の南端部にほぼ重複して建てられた二間×三間（4.7×7.5m）の南北棟。方位もSB04と同じで、柱穴掘形の切り合いから前後関係は明らかだが、さほど時期差はないと思われる。

竪穴建物 SI6001

調査区西南端部を掘り下げたところで検出した竪穴建物。SI6003によって破壊されている。この調査区の中では最も時期の遡るものである。



- | | |
|-----------------------------|------------|
| 1 灰色粘土層 | 12 淡褐色土層 |
| 2 暗灰色粘土層 | 13 暗黄色褐色土層 |
| 3 黄褐色・暗黄褐色土層（西壁）、暗灰色粘土層（北壁） | 14 褐色土層 |
| 4 暗褐色土層 | 15 暗黄褐色土層 |
| 5 青灰色土層 | 16 暗黄灰色土層 |
| 6 暗灰色土層 | 17 淡黄灰色土層 |
| 7 暗褐色（淡黄灰色土混）土層 | 18 暗褐灰色土層 |
| 8 暗褐色土層 | 19 細砂礫層 |
| 9 炭混り焼土 | 20 淡褐色土層 |
| 10 暗灰色粘質土層 | 21 黒褐色土層 |
| 11 暗灰色粘質土層 | |

図42 脇本遺跡第6次調査 第1～3期 平面・断面図（1/150）

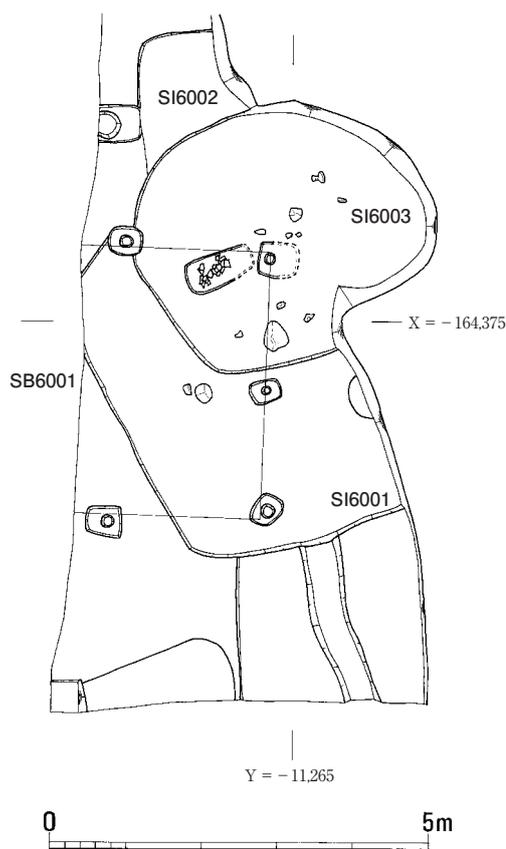


図43 脇本遺跡第6次調査
SB6001と下層のSI6001～6003 平面図（1/100）

210㎡のところをめぐっている。幅は約40㎡。SB6004の造営にかかわる施設であろうか。

素掘り溝 SD6002

SB6004の南北柱列に沿って続く南北方向の溝。調査区の南端から1.2mのところまで遺存している。現状での幅は約30㎡。SB6004の柱抜き取り穴内には、例外なく焼土が混在しているが、このSD6002内も同じ状況であることから、廃絶時はSB6004と同時期と見られる。性格は不明。

（4）出土遺物（図版44～45、表34・35、図版73～75）

第6次調査区の出土遺物は、図44-1、図45-17などに見られるように、弥生時代中期の甕や石庖丁が含まれている。弥生時代中期の遺構、遺物は、北側の神社背面の丘陵地の調査から甕棺も出土しており、同時期の集落が営まれていたのだろう。

竪穴建物SI6001からは、弥生時代後期の甕（図44-4～6）が出土した。また竪穴建物SI6003からは、土師器（図44-3）が出土している。SI6003の埋没後、SB6001の柱穴掘形が切り込まれている。

竪穴建物SI6002からは、図45-9・16の土師器高杯、須恵器杯身が出土しており、SI6003に切られていることから、この建物は5世紀中葉期と考えられる。

竪穴建物SI6004は調査区の北東隅にあり、そこから5世紀末～6世紀前半の須恵器片が出土している。調査区北西隅のSI6005からは、図45-14が出土している。一辺5m近い大型の竪穴建物で、飛鳥

竪穴建物 SI6002

建物の北西端部の一部しか確認出来ていないが、SI6003によって破壊されている。

竪穴建物SI6003

竪穴建物SI6001、6002の後に造られた建物。床面に土器片を多く残している。掘立柱建物SB6001の直前まで機能していた住居跡と見られる。

竪穴建物SI6004

調査区の北東隅で西辺と南辺の一部を検出した。一辺5m以上の方形の住居跡と見られる。

竪穴建物SI6005

調査区北西端で検出した一辺3.5mの方形の竪穴住居と見られる建物。土師器、須恵器片が出土している。SB6004廃絶後に造られている。建物の方位はSB6004に共通している。

素掘り溝 SD6001

SB6004とほぼ平行して側柱の中心から約

時代（7世紀初頭）のものと考えられる。

（5）小結

第6次調査にあたって注意されていたことは、第5次調査で検出した石垣、溝に関連する遺構が存在するのではなかろうかという点と、脇本遺跡の中心的位置にある春日神社に最も隣接する地であり、重要な遺構が検出されるのでは、という点にあった。

調査の結果は予測に近いもので、いくつかの重要な成果をあげることができた。

まず掘立柱建物SB6004は6世紀前半の土器を出土した竪穴建物SI6004より新しく、7世紀初頭の土器を持つSI6005より古いことから、広く幅をとってみても6世紀後半の時期が与えられる。形態、規模ともまだ不確定要素は多いが、現状でも6世紀後半の遺構としてはきわめて規模の大きい建物と言えよう。

第5次調査で検出した石溝、石垣、第3・4次調査で検出した三間×三間（5.7×6.3m）の掘立柱建物SB4002も、出土土器からみて6世紀後半から末葉と見られることから、これらは一連の遺構と考えて良からう。

掘立柱建物SB6005は時期を限定する遺物は出土していないが、SB6004の南半部にほぼ重なっていることから、この建物廃絶後間もなく建てられたと見て良いだろう。

掘立柱建物SB6002・SB6003についてはSB6004によって柱穴掘形が壊されていることから、SB6004より先に建てられたものには違いないが、詳細な時期については不明。

掘立柱建物SB6001は、調査区の南西隅の整地土層下から検出されたもので、建物方向から見ても、第1・2次調査で確認した5世紀後半の建物群と同時期と見て良からう。そのことは、5世紀中葉の土器を残すSI6003廃絶後、すぐに建てられた可能性が強いことから充分考えられる。

（前園）

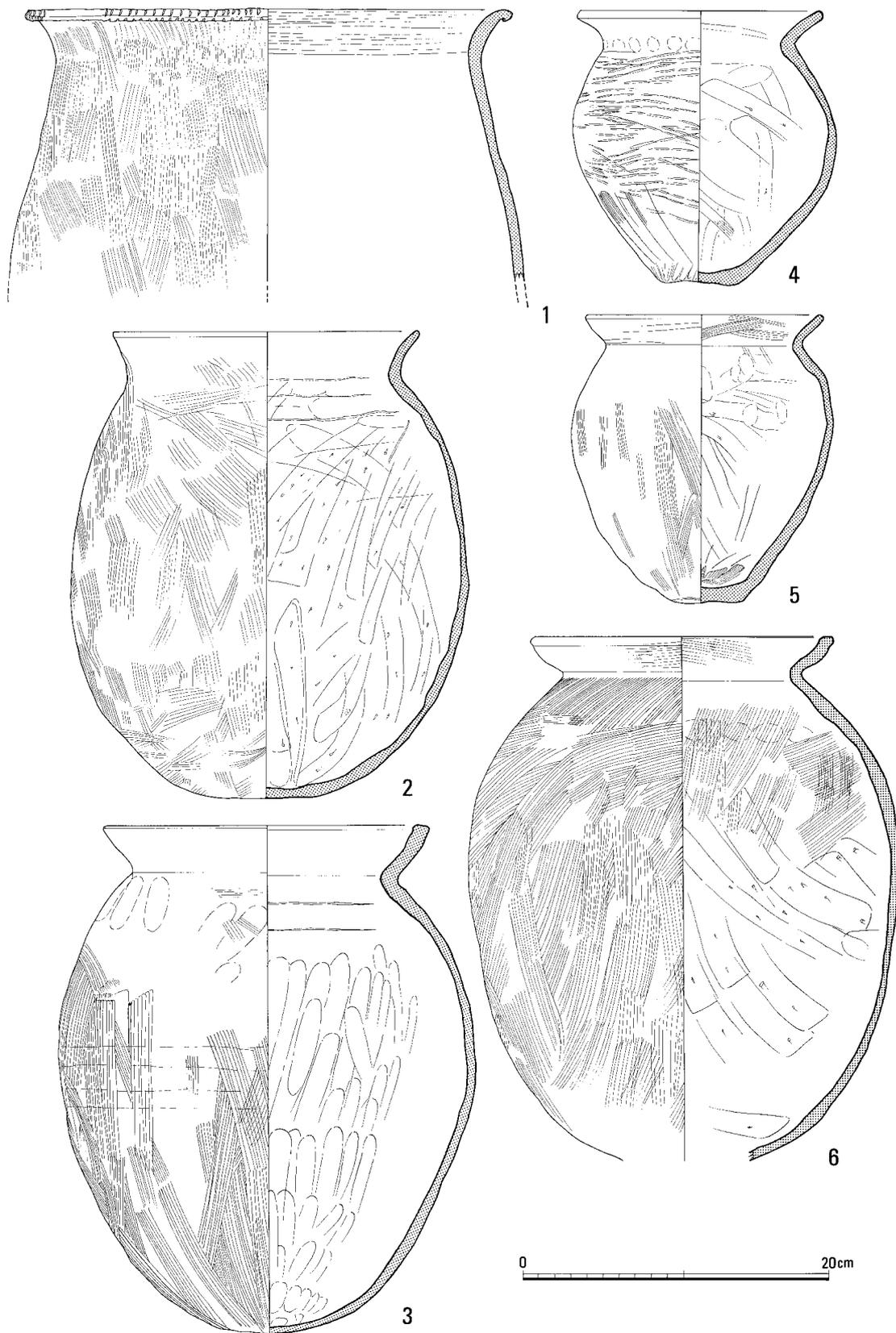


図44 脇本遺跡第6次調査出土遺物 (1) (1/4)

1 : 不明 2 : SI6001 3 : SI6003 4 ~ 6 : SI6001

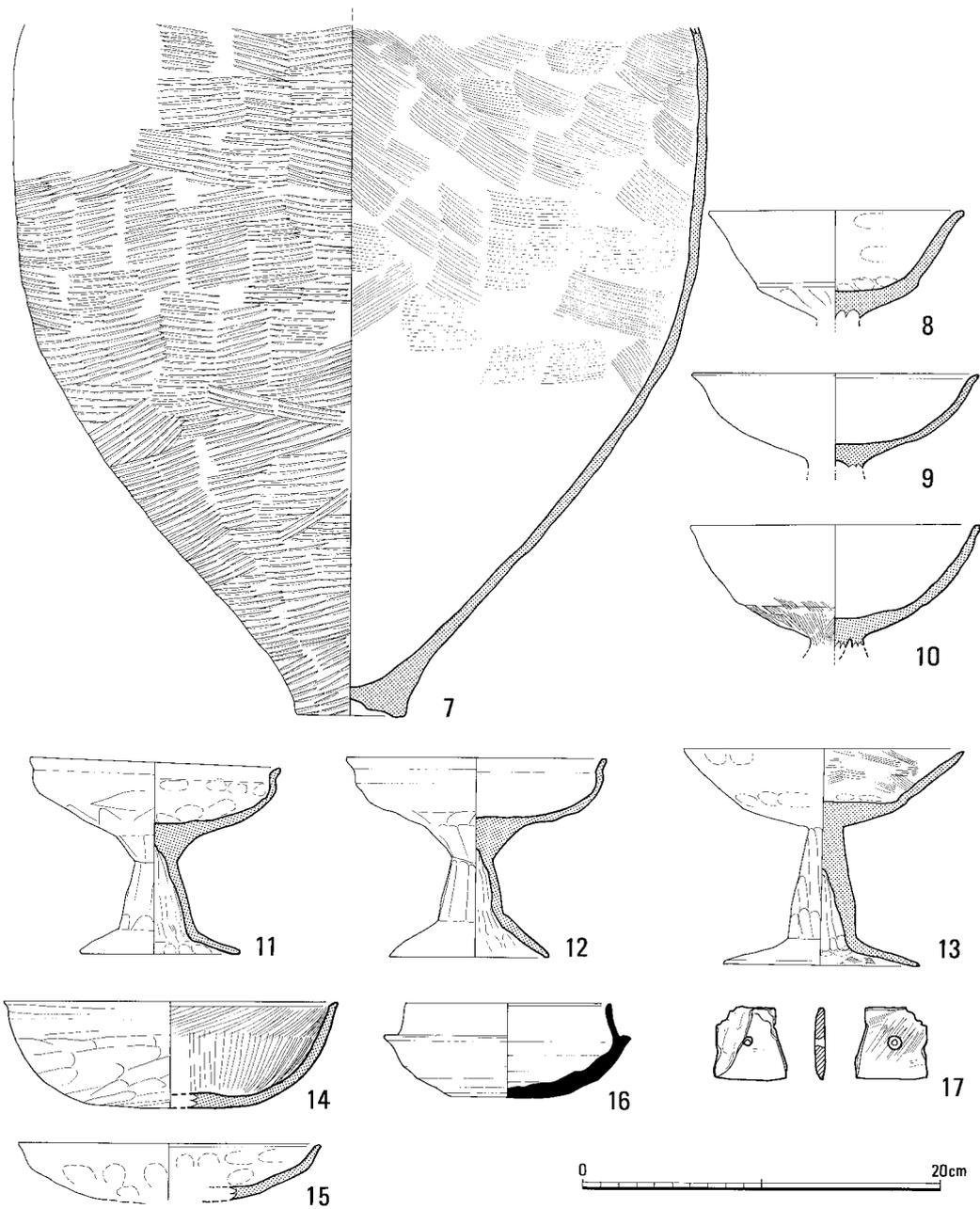


図45 脇本遺跡第6次調査出土遺物（2）（1／4）

7：東区 8・10：南西土器群 9・16：SI6002 11：中央柱穴列 12・17：不明 13・15：西側（三角部）14：SI6005

表34 脇本遺跡第6次調査出土遺物観察表(1)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼胎	調 成土	備考
44-1 73-1	土師器	甕		外反する口縁は端部で折り返し面をつくる。口縁端に刻目文がある。	外面の口縁部は刻目文。体部にハケメ。内面の口縁部は横ナデ、体部にナデ。	褐色 0.5mmの白砂砂粒(石英)を含む		
44-2 73-2				〃	西トレンチ 下層 SI6001 890309	くの字形に外反する口縁。端部は丸くなって終る。体部は丸く大きく脹らみを持つ。	外面の口縁部はナデ、体部にハケメ。内面の口縁部はナデ、体部に板ナデ。	淡乳橙色 良好 良好(密)
44-3 73-3	〃	甕	SI6003 北東土器群 890315	くの字形の口縁。先端は平坦に終る。肩～腹部が大きく脹らむ。	外面の口縁部はナデ、体部にハケメ。内面の口縁部はナデ、体部は指頭ナデ。	灰茶褐色 良好 良好(密)		
44-4 73-4	〃	甕	SI6001 北東土器群 890315	くの字形に外反対する口縁。先端は丸くなって終る。やや扁平な小ぶりの甕。	外面の口縁部はナデ、体部にタタキ後ナデ、頸部に指頭圧痕がある。内面の口縁部はナデ、体部にヘラケズリ。	茶褐色 良好 1～5mmの白砂を多く含む		
44-5 73-5	〃	甕	SI6001 北東土器群 890315	くの字形の口縁、先端は丸く終る。少し肩の張った小ぶりの甕。やや形体がいびつ。	外面の口縁部はハケメ後ナデ、体部にハケメ。内面の口縁部はハケメ、体部にヘラケズリ、底部にハケメ。	茶褐色 良好 1～5mmの白砂を多く含む		
44-6 74-6	〃	甕	SI6001 北東角 890315	くの字形に外反する口縁。端部は丸く面をつくる。腹部は大きく脹らむ。底部は欠失している。	外面の口縁部はハケメ後ナデ。体部にハケメ。内面の口縁部はハケメ後ナデ。体部は上方にハケメ、指頭圧痕あり。中央～下方ヘラケズリ。	橙褐色 良好 1～5mmの白砂を含む。		
45-7 74-7	〃	甕	東区 890202	大型の甕。口縁部は欠失している。腹部は大きく脹らむ。底部は小さく、底面は中央部にへこみがある。	外面は体部にタタキ。内面の体部上方はハケメ、下方にナデ。	外：茶褐色 内：褐色 1～2mmの白砂を含む		
45-8 73-8	〃	高杯 (杯部)	南西土器群 890227	底部から屈曲し、外反して伸びる口縁。端部は外方を向き丸くなって終る。脚部は欠失。	外面の口縁部はヨコナデ。底部にケズリ後ナデ。内面は指頭ナデ。	赤褐色 砂粒(白砂・石英)を多く含む。		
45-9 75-9	〃	高杯 (杯部)	SI6002内 890214	底部からなめらかに外反して伸び、口縁端は内側に傾斜面を持つ。やや浅めの杯部。				
45-10 75-10	〃	高杯 (杯部)	南西土器群 890227	底部から丸くなめらかに伸びる口縁。端部は丸く終る。	外面の口縁部はナデ、底部はハケメ、体部はナデ。接合痕がある。内面はナデ。	赤褐色 0.5～2mmの白砂石英を含む。		
45-11 75-11	〃	高杯	中央柱穴列 890315	浅く扁平な杯部は、口縁部で屈曲し短く外反する。筒部は中空で、脹らみを持つ。裾部は屈曲して伸び、裾先端は丸みを持って終る。	外面は口縁部ナデ、体部～筒部ヘラケズリ、裾部ナデ。杯部と筒部の境に接合痕。内面は口縁ナデ、体部指頭ナデ、筒部ナデ、裾部指頭痕。	橙褐色 良好		
45-12 75-12	〃	高杯		浅く扁平な杯部は、口縁部で屈曲し短く外反する。筒部は中空で、丸く脹らみを持ち、裾部は屈曲して伸びる。	外面は口縁部ナデ、体部～筒部ヘラケズリ、裾部横ナデ、杯部と筒部の境に接合痕。内面は口縁部ナデ、体部指頭ナデ、筒部ナデ、裾部指頭ナデ。	橙褐色 白砂、雲母を含む。		
45-13 75-13	〃	高杯	西側(三角部) 第4層(中層) 890303	浅く扁平な杯部は、底部から屈曲し、外方向にまっすぐ伸び、口縁端は薄く尖り気味に終る。中実の筒部は中央部で脹らみ、裾部は屈曲して大きく広がり端部に面をつくる。	外面は口縁部～体部指頭ナデ、筒部ヘラケズリ、裾部ナデ。内面は口縁部ハケメ後ナデ、体部指頭ナデ、筒部ヘラケズリ、裾部ハケメ後ナデ、指頭圧痕。	茶褐色～黄杯褐色 白砂粒を含む		
45-14 75-14	〃	杯	SI6005 890213	口縁は内面に傾斜面をつくる。	外面			

表35 脇本遺跡第6次調査出土遺物観察表(2)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼胎	調 成 土	備 考
図45-15 -	土師器	杯	西側(三角部) 第4層(上層) 890303	口縁は先端で小さく屈曲し、外反する。ススが付着している。	外面の口縁部は横ナデ、体部に指ナデ。内面は指ナデ。	茶褐色 砂粒を含む		スス 付着
45-16 -	須恵器	杯身	SI6002 890214	立ち上りは内傾して伸び、端部は丸くやや肥厚して終る。受部は水平方向に伸び、丸く短く鋭さを持たない。扁平気味の杯。	外面の口縁部はナデ、体部～底部にヘラケズリ。内面はナデ。			
45-17 75-17	石器	石庖丁		中央部に孔がある。		緑灰色		

第6節 脇本遺跡第7次調査（宮ノ本地区）

（1）はじめに

第6次調査で検出した大型建物SB6004の東側に隣接する水田に調査区を設定した。調査面積は、約230㎡。

（2）層序

隣接する第6次調査区と同様、耕作土の青灰色土層（第1層）、床土の橙灰色土（第2層）と第3層の褐灰色土層を取ると、遺構面の黄褐色土層（第4層）が現れる。西壁の北端近くには、住居跡と見られる竪穴建物（SI7002）の一部の断面が認められる。第11層はその床面の下層に当たり、焼土が混じっている。その上層には広く炭混じりの焼土混褐色土層（第10層）が見られる。この壁面では不自然な形で第8層の灰色砂利層があり、調査区ほぼ中央から南には、第7層の砂礫層、第6層の褐色粘質土層が見られる。西壁の南端部と南壁ではその上に第5層の淡褐色土層が広く存在している。これらは平坦面の必要な第4層の、遺構面を確保するための人工的な整地土と考えられる。

（3）検出遺構（図46・47、図版40・41）

第7次調査区は春日神社境内のすぐ南に接し、第6次調査区のすぐ東に隣接することから、遺構の存在が期待されていた。しかし、第6次調査区で検出した大型建物（SB6004）はこの調査区までおよばず、一間×八間の南北棟で、東西両面庇付きの建物であった可能性が強くなった。

石溝、石垣、敷石 SX7001

第5次調査区北部で検出したSX5001に続く遺構として、多数の礫群を検出した。調査区の中の3、4区と7・8区を掘り下げると、3区では石垣の一部が認められ、その南側には幅約2mの凹みが認められ、南側には礫層が続いている。隣接する第5次調査区で検出した大規模な整地層に伴う暗渠遺構であろう。

土坑 SK7001

3区の敷石遺構群を切って7世紀中葉頃の杯、馬歯を入れた小土坑。

竪穴建物 SI7001

調査区北西部の礫群の下層から検出した。2.8×3.8mの方形で、鉄製刀子と銅鈴が出土している。出土土器から6世紀代の遺構と考えられる。

竪穴建物 SI7002

SI7001の西に約1.5mを隔てて位置しているが、大部分は西壁からさらに西に広がり、また南辺も遺存状態が良くないため、一辺2m以上の方形のもので、内部から5世紀後半の土器が出土している。

（4）出土遺物（図48～50、表36・37、図版39～41・76～78）

この地区においても、弥生時代中紀の土器片が多く出土したが、図48-1～5、11の土器片が図化できた。弥生時代中期中葉期の櫛目文様を多用した壺、鉢類が見られるのは、第6次調査区と同様であった。この調査区の特徴的な出土品として、5区検出の竪穴式建物SI7001出土のものがある。SI7001は、

二次期にわたって拡張されており、図50-16（鉄製刀子）・18（銅製鈴）が出土している。図49-14の取手付き広口口縁鉢も出土しており、上記の鈴や刀子がセットであれば、6世紀後半～7世紀初頭に位置する遺物になろう。住居と見られる竪穴建物からの銅鈴の出土例は他に乏しく貴重な資料となろう。



図46 脇本遺跡第7次調査 平面・断面図 (1/150)

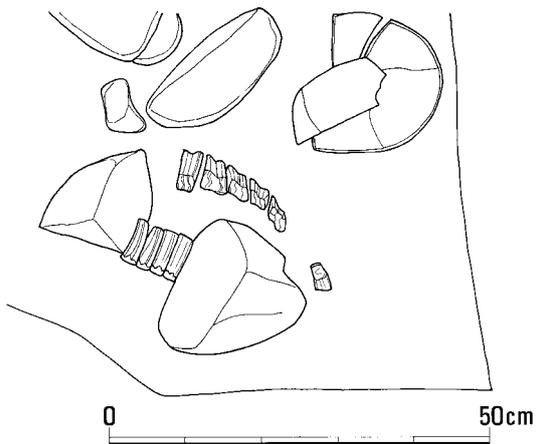


図47 脇本遺跡第7次調査
土坑SK7001内出土の馬齒と杯 平面図 (1/10)

(5) 小結

この調査区では第5次調査区で検出したSX5001の続きの確認と、第6次調査区で見られた大型建物SB6004の広がりを確認することを第一義としていた。その結果、現地形では見ることは出来ないが第7次調査区から第5次調査区にかけて北東から南西方向に大きく段差があり、その部分を大規模に造成していることが明らかになった。この造成工事の時期は一時期ではなく、5世紀後半から7世紀にかけて幾度か行われているようだ。その時期はこの脇本地区一帯に広がる規模の大きい掘立柱建物群の造営時期に連動している可能性があると思われる。

この調査区においても、第3・4・6次調査区と同様に、大型建物群の存在期間の間隙をぬって竪穴建物が造られている。

(清水)

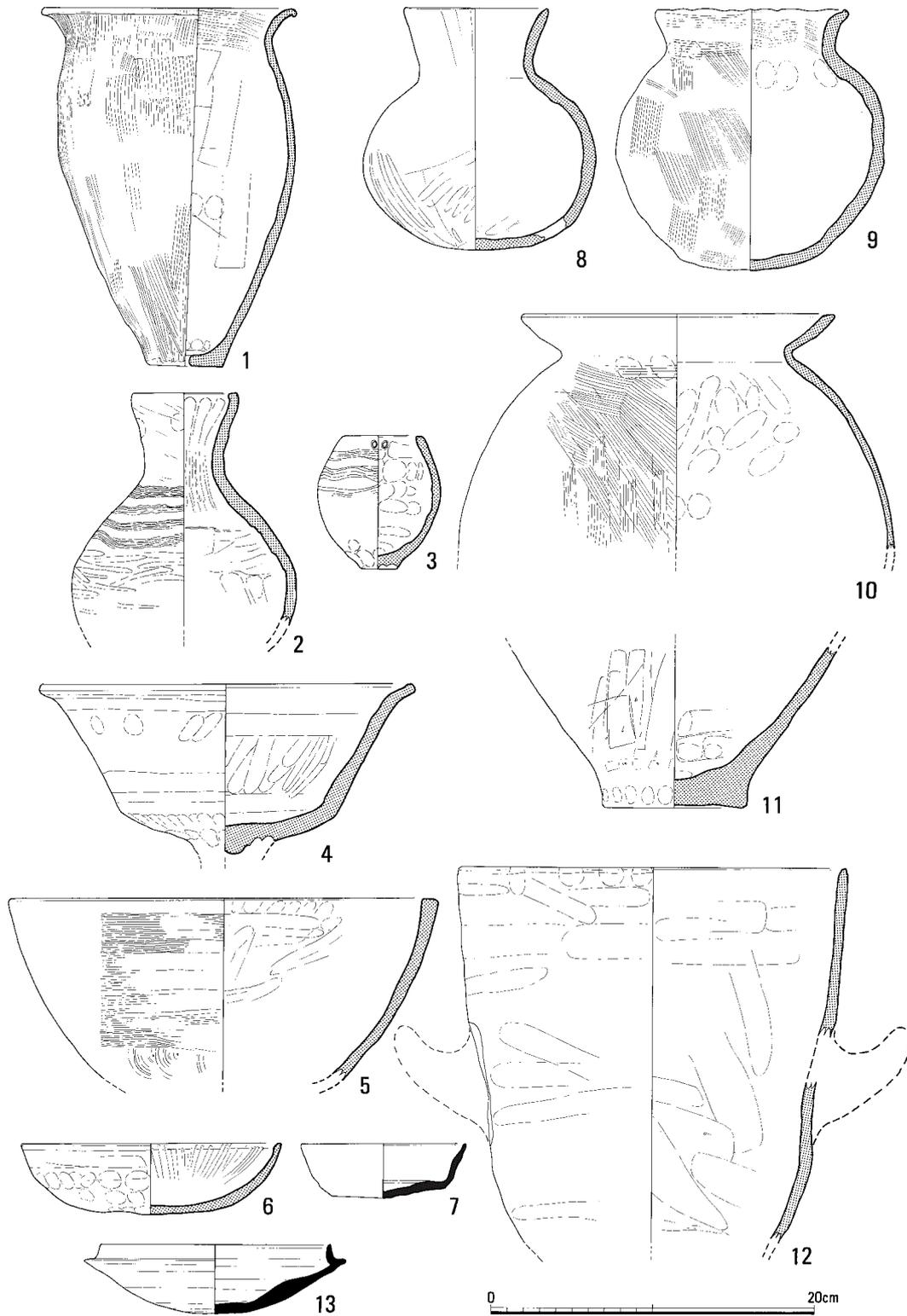


图48 脇本遺跡第7次調査出土遺物 (1) (1/4)

1・3・11:10区 2・5:11区 4・12:1区 6・7:4区 8:12区 9:中央礫層北
10:12区 13:不明

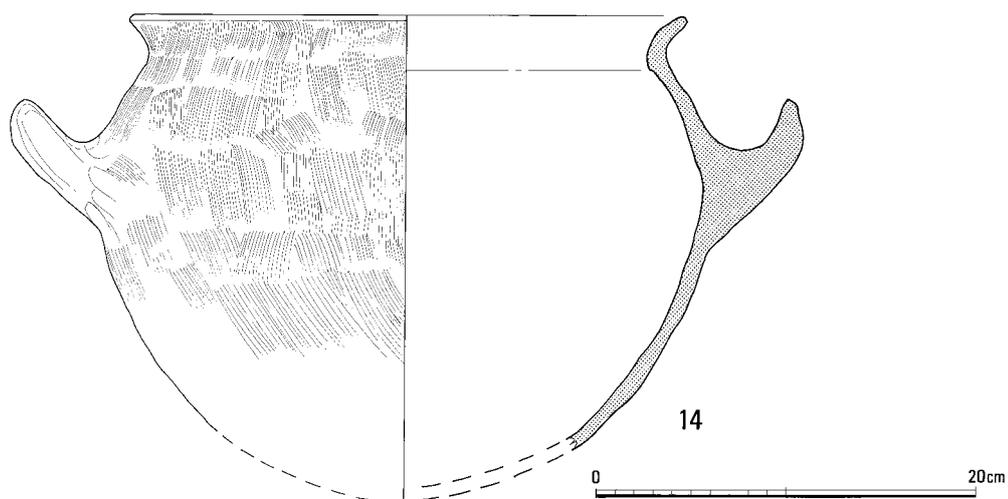


図49 脇本遺跡第7次調査出土遺物 (2) (1/4)

14: 5区

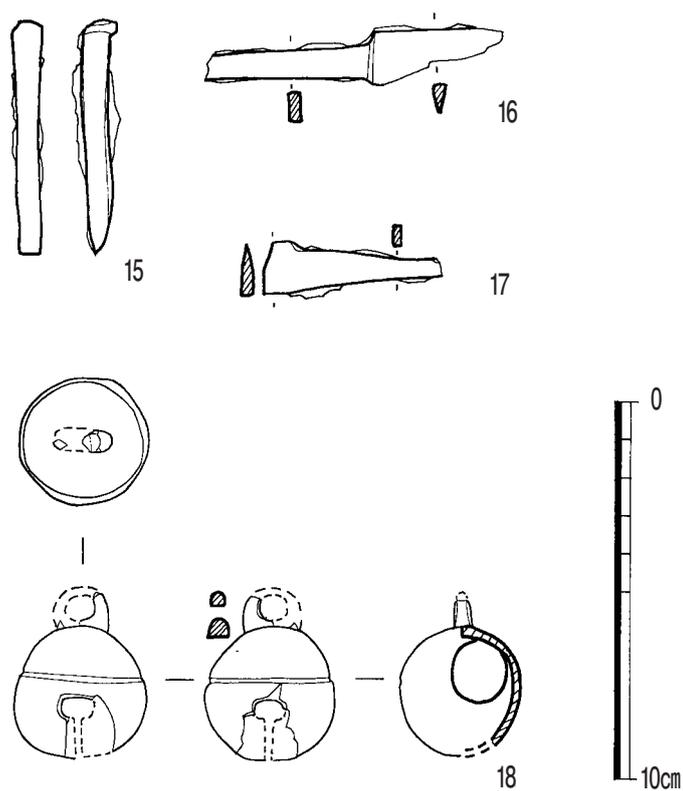


図50 脇本遺跡第7次調査出土遺物 (3) (1/2)

15: 10区 16・18: 5区 17: 11区

表36 脇本遺跡第7次調査出土遺物観察表(1)

図番号 図版番号	種類	器種	出土地	形態	手法	色 焼胎	調 成土	備考
48-1 76-1	弥生土器	甕 (甗) ?	10区 891223	短く外反して伸び、先端部で折り返し面を作る。体部は脹らみを持たず細長い形態。平底の底面の中央に孔がある。甗として使用されていた様子(?)。	外面はハケメ。内面は板ナデ。指頭圧痕がある。	茶褐色 良好 白色砂を多く含む		
48-2 76-2								
48-3 76-3	無頸壺	10区 891223	口縁は先端部で丸く厚みを持ち、二孔一対の小さな孔がある。体部は丸く脹らみを持つ。一部炭化している。	外面は指ナデ。肩部にクシ描文。内面は指ナデ。	灰褐色 良好 1～3mmの白色砂を含む。			
48-4 76-4						土師器	高杯 (杯部)	1区 土坑02内 900115
48-5 76-5	鉢	11区 891223	口縁は外上方に向って、なめらかに伸び、先端部は厚く平坦に終る。	外面の上部は直線クシ描文。下部にクシ描扇状文。内面は指ナデ。	茶褐色 良好 1～4mmの白色砂を含む。			
48-6 76-6						杯	4区 小ピット 900109	口縁端部は内傾し、丸みを持って終る。扁平な形態で、底部の造形がいびつ。
48-7 -	須恵器	杯	4区 891223	屈曲して立ち上る口縁は、端部で薄く尖り気味に終る。全体にいびつな造形。	ナデ調整。			
48-8 77-8						土師器	壺	12区 900115
48-9 77-9	甕	中央層北 891209	直立する口縁は端部で小さく屈曲し、先端はつまみ上げられて終る。体部は丸く大きく脹らむ。やや小ぶりの器形。	外面は乱調ハケメ。口縁先端部はナデ。内面は口縁部ハケメ。頸部に指頭圧痕がある。	桃灰褐色 0.2～5mmの白砂粒を含む 酸化鉄分付着			
48-10 -						甕	12区 900115	くの字形に外反する口縁は、端部で肥厚し、先端に斜傾面を持つ。体部の器壁を薄い。
48-11 77-11	甕 (底部)	10区 891223	わずかに上げ底となる底部。安定している。	外面はヘラケズリ。内面はナデ。指頭圧痕がある。底面はナデ。	灰褐色 良好 白色砂粒を含む			
48-12 77-12						甗	1区 土坑02 900115	直立する口縁。先端は小さくつまみ上げられて終る。把手は上向きにつく様子。底部は欠失している。
48-13 -	須恵器	杯身	立ち上りは短く、端部は内傾する。受部は水平方向に丸みを持って突出する。浅く扁平な杯身。					
49-14 77-14				土師器	甕	5区 土坑01 900109	短く外反する口縁。先端部は外面に面を作る。把手は上向きに屈曲を持ちながら外反し、先端は尖り気味に終る。底部は欠失している。	外面の口縁部はハケメ後にナデ。体部にハケメ。把手は指ナデ。体部との接合部に指頭圧痕がある。内面はナデ。指頭圧痕がある。

表37 脇本遺跡第7次調査出土遺物観察表(2)

図番号 図版番号	器種	出土地	法量	備考
50-15 77-15	鉄釘	10区 石溝内 891226	全長6.1cm、幅0.7cm	
50-16 78-16	鉄刀子	5区 891226	残存長8.0cm、刀背厚0.4cm、茎部幅0.8cm、茎部厚0.4cm	
50-17 78-17	鉄鏃	11区 900105	残存長4.7cm、茎部幅(最大)1.0cm、茎部厚0.3cm	
50-18 78-18	銅鈴	5区 土坑01 900105	直径3.4cm、残存高4.3cm	

第7節 まとめ

昭和56年（1981）7月、桜井市立朝倉小学校体育館建設に先立って行われた発掘調査で、古墳時代後期の石組み溝、さらに昭和58年（1983）4～7月に行われたプール建設予定地の調査で、同じく6世紀後半の柱列や溝が検出されたことから、この地域に重要遺構が存在することが明らかになった。

奈良盆地と東国との出入り口に当たるこの初瀬谷周辺には、『記・紀』をはじめ古典の中には、初期の大王宮殿の存在を示唆する記述が見えることから、桜井市と橿原考古学研究所が主体となって、昭和59年（1984）2月に「磯城・磐余の諸宮調査会」（以下「調査会」）が結成され、同年の4月23日から平成2年（1990）1月20日にわたって7次におよぶ調査が行われた。

調査総面積は1,539㎡とさほど広くはなかったが、いずれの調査区からも複数の時期の古代の遺構、遺物が検出され、当初の予測を裏切らない結果となった。

ここで遺跡の立地と環境、遺構、遺物等についてまとめを行い、この遺跡の歴史的意義についてもふれておきたい。

立地と環境

今回の調査地は、三輪山から南に延びる一丘陵の先端部に当たり、現在地区の氏神として祀られている春日神社の南の平坦部に広がっている。脇本地区と朝倉地区は初瀬川の支流の南北に流れる北山川によって分断されているが、遺構は両地区に見られることから、時期によっては同一の遺構群が開いていたものと見られる。

春日神社の境内の南の鳥居の前に立つと、正面には神奈備型の美しい外鎌山が目に入る。この山は古代には忍坂山と呼ばれ、『万葉集』にも詠まれている¹⁾。また手前前方には初瀬川が西流し、さらに東西は開け、後方は三輪山の支脈の南端に当たっている。また春日神社の境内には古墳時代の土器片が分布していたことを考慮すれば、すでに古代からこの地形の原型は存在していたことをうかがわせる状況にある。

それら周囲の状況を考慮してこの地を見ると、まさに風水にかなった土地であることが理解出来る。さらにここは奈良盆地から東国への主要な出入り口にも当たっている。西南に目をやれば、大型前期前方後円墳の桜井茶白山古墳を指呼の間にのぞむことが出来、さらにはるか前方には、金剛山と葛城山との間にある水越峠も遠望できる位置でもある。

「調査会」が第1次の調査地として選んだのは、その地区の西端部に当たる水田地の一画だった。その理由は、昭和14年（1939）頃に県道の改修工事を行ったときに、調査区のすぐ南で多くの土器が出土していたからだった。

幸いにも5×20m（100㎡）のトレンチ内で、南北方向に並ぶ2棟の掘立柱建物の一部を検出することができた。その遺構の時期が5世紀後半であったことから、「調査会」が目指した遺跡である可能性が強くなった。脇本第1次調査の成果をもとに、第2次調査は隣接地の発掘を行い、第3次調査以

降は、東方の水田を東に向かって発掘区を広げていった。そのわけは、第1次調査区の水田の西側は崖になっているため、遺構の広がりには期待できそうにないこと、また検出した建物が南北棟であることから、遺構の中心は春日神社に近い東方にあるだろうとの予測を立てたことによる。

以下、7次におよんだ調査で検出した遺構群について、時期を追って見てゆく。

検出遺構

7次におよぶ調査で検出した遺構は、大きく7時期に分類することができる(図52)。ただここで断っておきたいことは、遺構が重複していることから、下層に行くに従って調査面積は減少していくため、情報が少なくなるということである。「調査会」が目指した5世紀代の遺構は、上層の遺構を取り除かない限り全貌は現れないが、この調査で少なくとも7世紀以前の遺構は保存するという方針で進めたため、下層遺構は断片的な資料しか得られてないという大前提がある。

脇本第1～7次調査で検出した7期の遺構の年代は、おおよそ以下の通りである。1期：5世紀後半以前、2期：5世紀後半、3期：6世紀前半、4期：6世紀中頃～後半、5期：6世紀後半：6期：7世紀前半、7期：7世紀後半とみている。

1期は第3・4次調査区で検出したSI3001・SI4002の2棟の竪穴建物と、第6次調査区の下層で一部を確認したSI6001～SI6003の3棟の竪穴建物、第7次調査区のSI7002があげられる。いずれ大規模な整地作業が行われる以前に存在していた建物であるが、第6次調査区の3棟の中では、SI6003が2棟との切り合い関係から後出であることは明らかだが、その上層から掘立柱建物SB6001を検出していることから、6棟の竪穴建物は5世紀後半以前のものであることは明らかである。

2期の遺構は、第1・2次調査区で検出したSB1001・SB1002の2棟の掘立柱建物の南北棟と、第6次調査区の下層で一部を検出したSB6001・SB6002が相当する。しかも、この時期の建物を建造するにあたり、広範囲に大規模な整地作業が行われていることが明らかになっている。

第1次調査区のC区で多量の砂利、礎層が見られたが、その下層は第2次調査区の東端で検出したSD2001につながる暗渠であることが明らかになった。その中にはより多くの砂礫が充填されており、南に大規模に平坦地を拡張する必要のために、旧来の地形との間の水はけを考えた地業であろう。この状況は第5次調査区の西壁でも確認されており、この層以下からは5世紀後半以前の土師器、須恵器。弥生土器片などが出土する。以上のように今回の調査区全体を見ると第1・2次調査区の南半から第5次調査区の北半にかけてのライン以南は大規模な整地土層で覆われていると見て良い。

第1次調査区を選択した理由の一つに、1939年に発刊の『磯城』に記載された「朝倉村灯明田遺跡似について」、「朝倉村出土遺物について」などの報告があるが、ここに記された多くの遺物は、第1次調査区の南接地から出土したもので、おそらく大規模な整地土の中に含まれていた遺物であろう。

また第3次調査区のSI3001では土師器が床面に置かれた状態で、さらに焼土が床全体を覆っており、SI4002の竪穴建物内にも焼土が確認できることから、これらは竪穴建物の廃絶状態を示すものと見られる。

また遺跡の後方に鎮座する春日神社の境内は、三輪山から南方に派生した小支脈の先端部を切断し、その平坦地を利用していることが観察されるが、周辺部の分布調査の際、境内で6世紀代の須恵器片を採集している。おそらくこの削平した土砂も南方の整地土として利用した可能性が強い。したがって、脇本遺跡は、この時点で竪穴建物の集住する地区から、掘立柱建物群を中心とした施設に移行していったのであろう。

SB1001・SB1002・SB6001・SB6002がこの時期の遺構と見られるが、この層まで掘り下げた部分は限られており、調査区内の下層にまだこの時期の遺構が存在している可能性はある。第6次調査区の北西端で一部検出したSB6003はSB6002と重複しているため明らかに後出のものだが、方位などから見ても共通していることから、さほど時期さは考えられないと思われるのでこの範疇に入れてもよからう。

3期は掘立柱建物が見られず、再び竪穴建物が登場する。第4次調査区のSI4001、第6次調査区のSI6004、第7次調査区のSI7001の3棟でいずれも方形のもので、6世紀代の遺物を出土する。

3期は掘立柱建物が見られず、再び竪穴建物が登場する。第4次調査区のSI4001、第6次調査区のSI6004、第7次調査区のSI7001の3棟でいずれも方形のもので、6世紀代の遺物を出土する。

4期になると再び掘立柱建物が登場するがその方位は、2期の建物よりさらに西偏する。また第5次調査区では調査区の北東隅から南西方向に石垣状の遺構が続き、その南側には石組みの側溝が一部遺存している。この施設の造成土の中から6世紀後半の須恵器片が多く出土することから、石垣および水路の時期の上限を知ることができる。

SB4001は東西、南北ともに三間の総柱建物で、倉の可能性が考えられる。建物の方位は北16°西。柱穴掘形内から6世紀後半の須恵器片が出土している。

第6次調査区で検出した南北棟SB6004は南北八間、東西は母屋と見られる一間の西側に庇の付く片面庇建物で、主軸の方位は北20°西で、SB4001に近い。この建物の母屋部分の南端に重なって二間×三間の南北棟SB6005を検出した。柱穴掘形の状態からSB6005が新しく建てられたことは明らかだが、二棟の間の時期差はわずかと見られる。しかし、柱穴掘形の重複から、この時期を5期としておく。

6期には第6次調査区の西北隅に一辺3.5mの方形竪穴建物一棟がある。SB6004の庇部分の北端部の柱穴掘形を切っているが、方位は共通することから、5期に含まれるかも知れない。建物内から7世紀前半代の土師器杯が出土している。

7期は第2次調査区の掘立柱建物SB2001、第3次調査区の柵列SA3001とそれに続く見てよい第5次調査区のSA5001がある。第3・4次調査区の東端部で二間分検出した南北の柱穴掘形もこの時期と見られる。SA3001の東端部が調査区内で途切れていることと、この柱列との間に関係があるとすれば、柱列の間に設けられた入り口を示すものかも知れない。第5次調査区との間の未調査区が鍵を握っていると思われる。全て方位はほぼ磁北にあっている。柵列の柱穴掘形や遺構面から出土した須恵器片から、7世紀後半の遺構群と見られる。

遺物

今回の調査で大量の土器、特に土師器が出土したが、その多くは整地土層からのもので、1期以前つまり5世紀後半以前に存在していた竪穴建物を中心とした集落に伴うものと見られる。そんな中、第1次調査区の整地土層の上に掘られたSK1001は、出土した土師器が全て反転した状態で置かれており、大規模な整地に伴う地鎮のための遺構と思われる。南に隣接するSK1002には土器片とともに焼土が認められることから、同様の遺構と見て良からう。第3・4次調査区のSI3001・SI4002からは布留期の土器片がまとまって出土しているが、これらも1期の大規模な整地作業の直前の状況を示しているであろう。そのほか遺構に伴う遺物として注目すべきものとして、第7次調査区のSI7001から出土した鉄製刀子と銅鈴がある。

遺構群の成立と変遷

飛鳥時代以前の宮室が置かれていたと考えられる桜井市東南部において、「磯城・磐余諸宮調査会」が最初に調査地として選んだ脇本地区での発掘調査の成果は以上の通りであるが、ここで再度まとめておくと以下の通りになる。

まずこの一帯に5世紀後半に大規模な造成工事が行われたが、その範囲は現在の春日神社をほぼ中央に見て、東西約200m、南北約100mに及ぶ。三輪山から派生した丘陵の先端部をカットし、平坦部を確保し、この範囲のほぼ南半部は、北半部にすでに存在していた集落をも削平した際に生じた土や、北山川から運ばれた礫や土砂によって造成されている。遺跡から出土した大部分の土器は、この造成土に含まれていた。この大規模な工事の後に出現したのが第1・2次調査区のSB1001・SB1002の二つの南北棟と、第6次調査区のSB6001である。調査面積が少ないこともあり、検出した遺構はわずかだが、さらに周辺部には存在している可能性が強い。SB1001・SB2001が共に南北棟であることと、この遺構の西側から一段地形が低くなることから、この遺構群の西端部と考えられる。

この建物は建て替えの痕跡もほとんどないことから、機能していた時期はさほど長くはないと見られる。その後は6世紀前半の土器を持つ竪穴建物が、第4・6・7次調査区で3棟検出されている。

6世紀後半になると、調査区の中央部で再び掘立柱建物群が現れ、第5次調査区では石垣や石溝なども確認できた。この時期の遺構群は5世紀後半の建物群の方位とは異なり、主軸はやや西に偏りSB4002は北16°西、SB6004・SB6005は北20°西になる。この方位は奈良盆地の周辺部の6～7世紀代の遺構にしばしばみられるもので、創建期の法隆寺（若草伽藍）や斑鳩宮を含む、いわゆる斑鳩条里遺構に共通する。偶然の一致と見るよりも、大王家が蘇我氏の協力なサポートを得ながら、その権力を強化していく時期に当たっており、奈良盆地の主要な地域での土地改造と言ったものが行われた可能性が考えられる。

SB6004・SB6005ともに南北棟であり、主要施設の可能性は少なく、西側の倉庫と見られるSB4002の存在も考慮すると、この北方、つまり春日神社境内から西側にかけて、東西棟の主要建物が眠っている可能性は強い。

7世紀後半の長大な東西方向の柱列SA3001、SA5001は、第3・5次調査区で検出した。この柱列に関連すると見られる遺構に第2次調査区のSB2001がある。SB2001の北柱列がSA3001、SA5001の延長線上にあたるが、この部分のみ南に二間分広がる。南の柱列が東西に延びれば、その東延長線にあたる第5次調査区では柱列は存在しないことから、SB2001は長い柱列の西端部に付属する施設かも知れない。

また第1次調査区と第2次調査区の狭小な面積の中で、5世紀後半の遺構の西端部とほぼ重なることは、7世紀後半の遺構群の西端部を示しているのかも知れない。そのことは現地地形からも観察することができる。

またこの柱列の位置は、5世紀後半の大規模な埋土による造成地の北端部にも重なることから、7世紀後半の建物群の中心もまた、地盤のしっかりした北方地区に存在する可能性が高い。

以上調査結果のまとめを行ったが、第5章でこの遺跡の位置付けについては少し詳しく述べたい。

(前園)

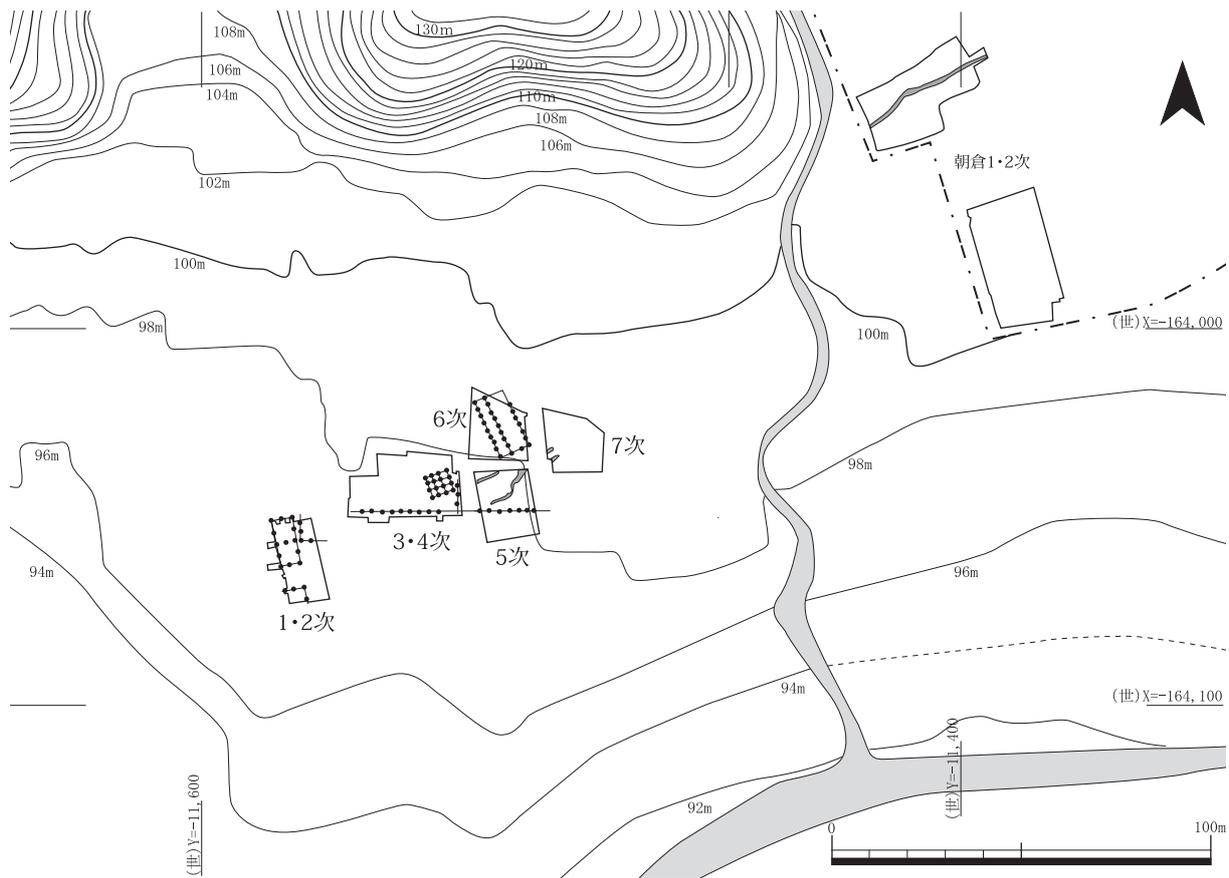


図51 調査区全図 (1/2,000) (井上主税氏作成)

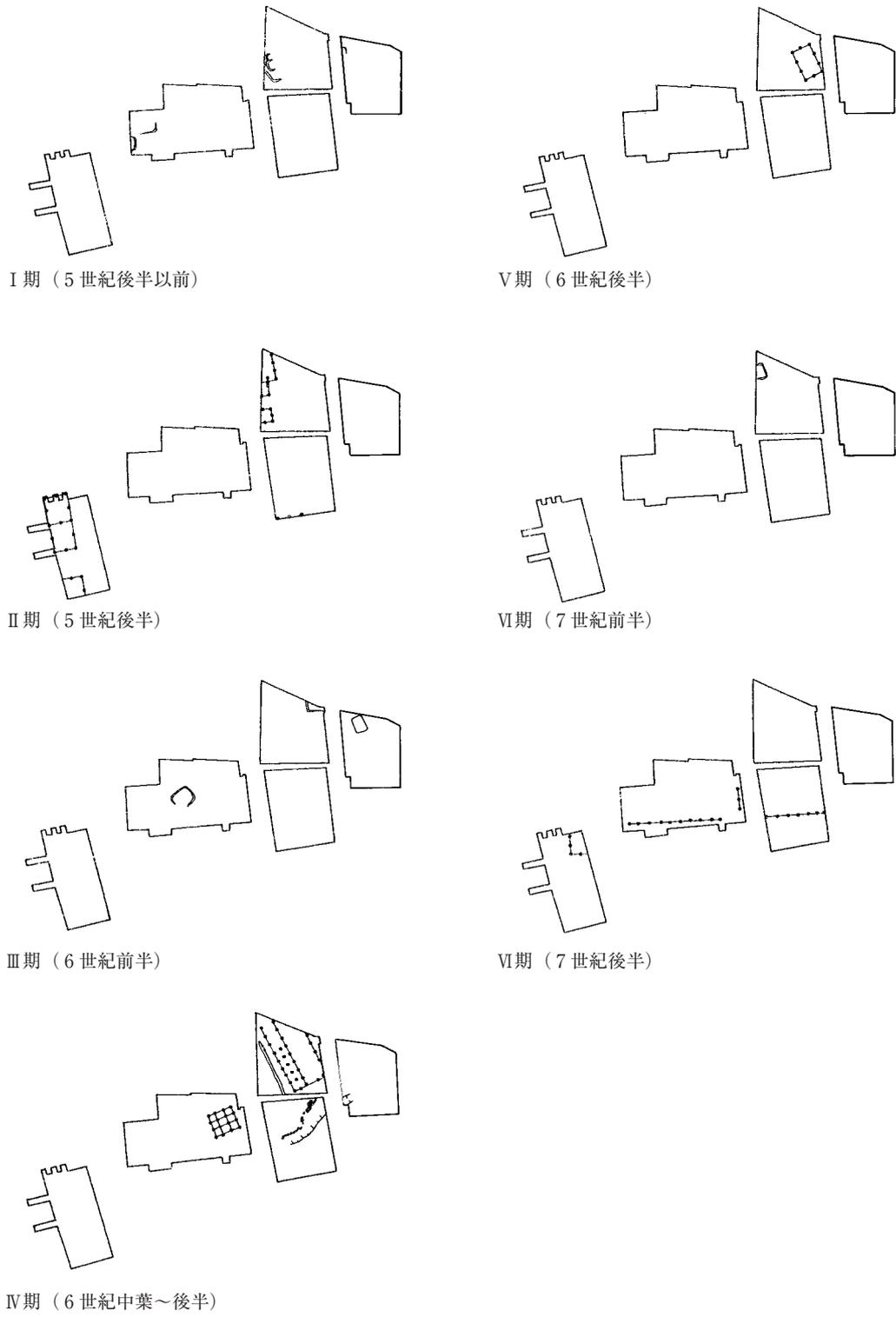


図52 脇本遺跡 遺構変遷図

第4章 自然科学編

第1節 脇本遺跡の石材の石種とその採石地

檀原考古学研究所特別指導研究員 奥田 尚

(1) はじめに

桜井市脇本にある脇本遺跡は、初瀬川が形成した右岸の河岸段丘上にある。この付近の地形は、北側山麓の急崖から初瀬川にかけて南側に穏やかに低くなっている。急崖と河岸段丘は、東西方向の断層で断たれている。遺跡にはこの地形を平坦にするためにか、整地のために使用されたと推定される土砂がみられる。建物遺構に伴う溝状遺構や敷石遺構、石垣状遺構に使用されている石材は角が丸くなった亜角～円礫が多く、整地のための土砂に見られる礫は角～亜角礫が多い。礫の表面は滑らかであることから谷川や川原石の様相を呈し、割石や加工石は認められない。溝状遺構・石垣状遺構・石敷遺構の石材と整地に伴う土砂に含まれる礫の観察結果について述べる。

(2) 溝状遺構・石垣状遺構・石敷遺構の石材

第5次調査の遺構にみられる石材の表面を裸眼で観察した。識別できた石種はアプライト質黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、斑糲岩、変輝緑岩である。これらの石種の特徴と推定される採石地について述べる。

アプライト質黒雲母花崗岩：色は灰白色で、粒形が角～亜角である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～3mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が3～8mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で、粒径が0.5～1mm、量がごくごく僅かである。

このような岩相の石は、当遺跡北方の山地に分布する片麻状黒雲母花崗岩、初瀬川左岸に分布する黒雲母花崗岩の中に部分的にみられる。当遺跡の北東方の谷川にも角～亜角礫で、初瀬川の川原では亜円礫でみられる。

黒雲母花崗岩：色は灰白色で、粒形が亜円～円である。石英・長石・黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～1.5mm、量が中である。長石は灰白色、粒径が1～1.5mm、量が中である。黒雲母は褐色で、粒径が1～1.5mmで量が中である。

このような岩相の石は、初瀬川左岸に分布する黒雲母花崗岩の中に部分的に見られる。初瀬川の川原では亜円～円礫でみられる。

斑糲岩：色は暗緑灰色～灰緑色で、粒形が角～亜円である。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は灰白色、粒径が2～5mm、量が多い。角閃石は黒色、粒径が2～5mm、量がごく僅かである。輝石は暗緑色で、粒径が2～5mm、量が多い。

このような岩相の石は、当遺跡北方の山地に分布する斑糲岩の一部、初瀬川の上流一帯に分布する斑糲岩の一部に見られる。北東方の谷川では角～亜角礫で、初瀬川の川原では亜円～円礫で見られる。

変輝緑岩：色は暗緑灰色で、粒形が亜円～円である。長石・角閃石の班晶が散在する。長石は灰白

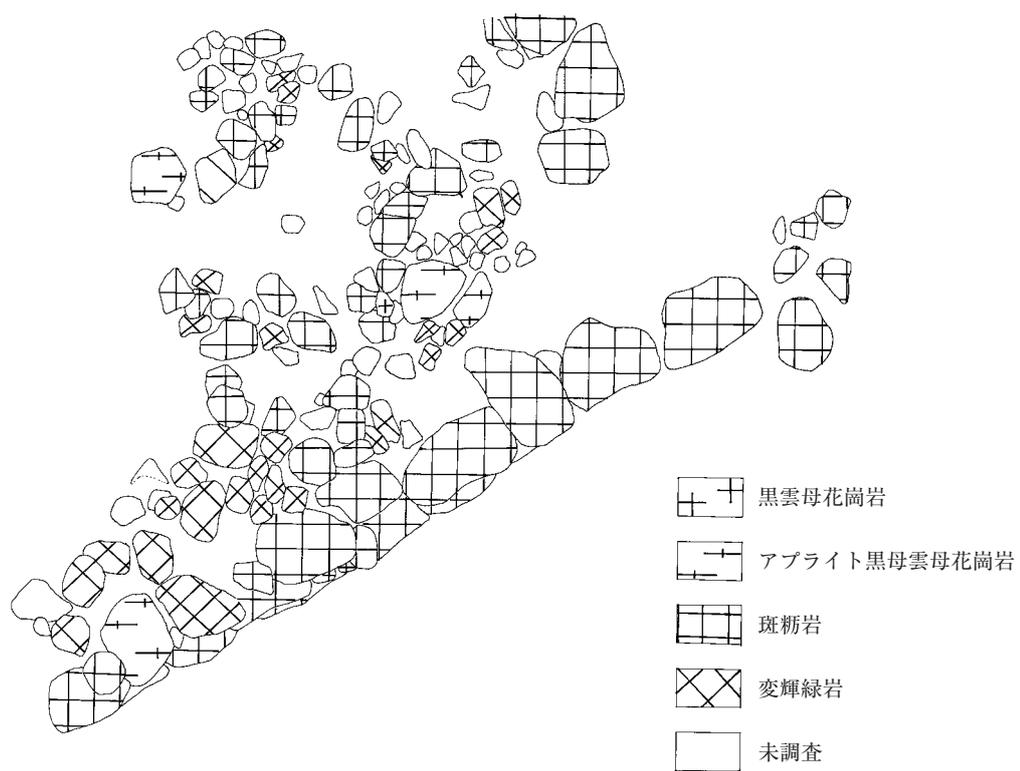


図53 脇本遺跡第5次調査 石垣状遺構石材 (1)

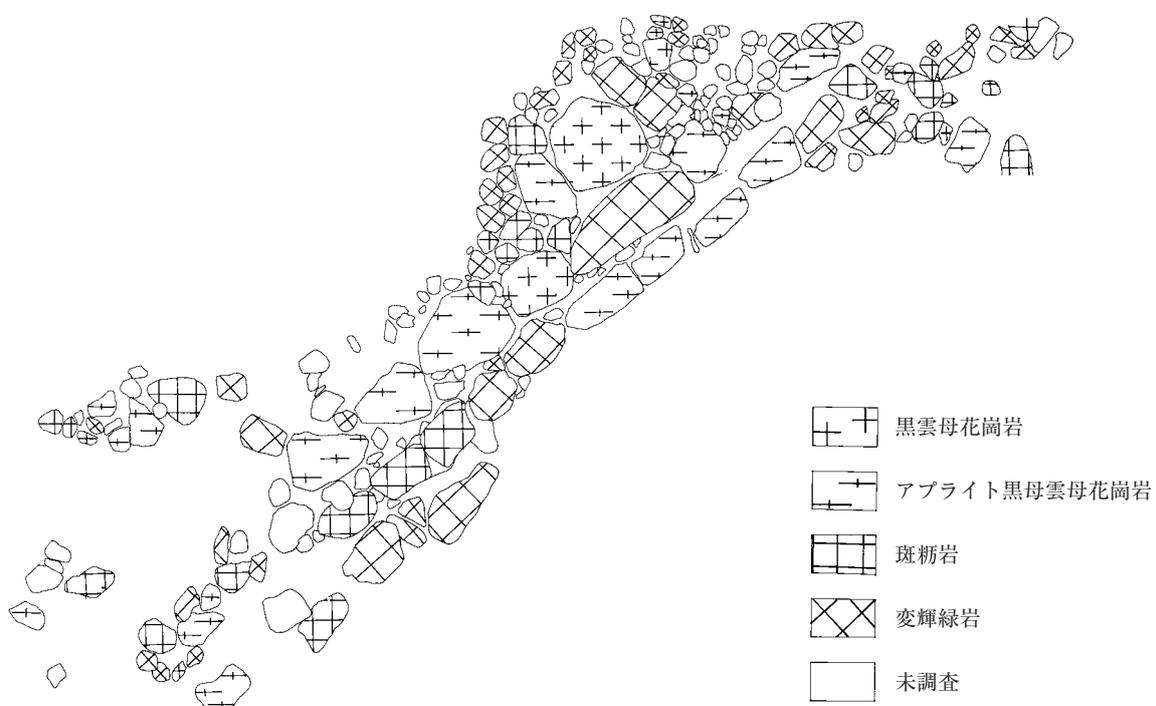


図54 脇本遺跡第5次調査 石垣状遺構石材 (2)

色、粒径が1～5mm、量が中である。角閃石は黒色、粒径が1～3mm、量が多い。石基はやや粒状である。

このような岩相の石は、領家花崗岩類にレンズ状をなして含まれる、変輝緑岩の岩相の一部に似ている。初瀬川の川原では垂円～円礫でみられる。

溝状遺構・石垣状遺構・石敷遺構に使用されている石材は、長径が20～70cm、粒径が角～円、表面が滑らかな川原石様で、割石や加工石でない。石材の石種の岩相と粒形から判断すれば、遺跡東方の谷川の石や初瀬川の川原石に酷似する。石種別にみれば、アプライト質黒雲母花崗岩は角ばっていることから遺跡東方の谷川で採石された石と推定され、黒雲母花崗岩や変輝緑岩は円いことから初瀬川の川原石と推定される。斑糲岩で角張っている石は東方の谷川、円い石は初瀬川から採石されたと推定される。調査した範囲でのみの判断となるが、当遺跡の遺構に使用されている石は東方の谷川と南方にある初瀬川で採石されたと推定される。

(3) 整地に伴う砂礫について

遺構面に散在する礫と整地土と推定される砂礫を裸眼で観察した。整地土と推定される砂礫約21kgの観察結果について述べる。この砂礫は整地時に東方の谷川が形成した扇状地の砂礫を使用したのか、初瀬川の砂礫を使用したのかを目的に観察した。採取した砂礫は16分の1mm、2mm、4mm、8mmの篩で、水中で篩分し、天日で乾燥後、台はかりで重量を測定した。

識別した砂礫種は、アプライト、アプライト質黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、白雲母花崗岩、白雲母黒雲母花崗岩、閃緑岩、斑糲岩、輝石安山岩、砂岩、変輝緑岩である。

石種の特徴

識別した石種の特徴について述べる

アプライト：色は灰白色である。粒形が亜角である。石英と長石が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～2mm、量が中である。長石は白色、粒径が1～2mm、量が多い。

アプライト質黒雲母岩：色は灰白色である。角礫が非常に多く、亜角礫がごく僅かである。微かに片麻状を示すものがある。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が2～4mm、量が中である。長石は白色、粒径が2～7mm、量が非常に多い。黒雲母は黒色、板状で粒径が1mm、量はごく僅かである。

黒雲母花崗岩：色は灰白色である。角礫が非常に多く、亜角礫が粗粒のものにごくごく僅かに見られる。石英、長石、黒雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～4mm、量が多い。長石は白色、粒径が1.5～4mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で粒径が1～3mm、量のごく僅かである。

白雲母花崗岩：色は灰白色である。粒形は亜角～円で、亜角礫が多い。石英、長石、白雲母が噛み合っている。石英は無色透明、板状で粒径が1mm、量のごく僅かである。

白雲母黒雲母花崗岩：色は灰白色である。亜角礫が非常に多く、垂円礫のごくごく僅かである。石英、長石、黒雲母、白雲母が噛み合っている。石英は無色透明、粒径が1～3mm、量が中である。長石は白色、粒径が1～5mm、量が多い。黒雲母は黒色、板状で長径が5～10mmの球状部に集合する。粒

径が1～1.5mm、量が僅かである。白雲母は無色透明、板状で粒径が1～8mm、量のごく僅かである。

閃緑岩：色は暗灰緑色である。粒形は亜角～亜円である。細粒の変輝緑岩を捕獲岩として伴う場合が僅かにみられる。長石・角閃岩が噛み合っている。長石は白色、粒径が4～5m²、量が多い。角閃石は黒色、柱状で粒径が2～7m²、量が多い。

斑糲岩：色は暗灰緑色～暗緑色である。粒形は亜角～亜円で、亜角が非常に多い。長石・角閃石・輝石が噛み合っている。長石は白色、粒径が2～5m²、量が多い。角閃石は暗緑色、柱状・粒状で、粒径が1～7m²、量が多い。輝石は黒色、粒状で、粒径が2～3m²、量のごく僅かである。

輝石安山岩：色は黒色である。加工破片である。微粒の長石・輝石が散在する。石基は黒色、ガラス質である。

砂岩：色は灰色である。粒形は亜円である。構成砂粒は中粒である。

変輝緑岩：色は暗灰色～暗暗灰緑色である。粒形は亜角～亜円が多く、角・円が僅かである。斑晶鉱物は長石と角閃石である。長石は白色、粒径は1～2m²、量が多い。角閃石は黒色、粒状・柱状で、粒径が1～1.5m²、量が多い。基質は粒状である。

(4) 砂礫種構成

整地土と推定される砂利の砂礫種・粒径・粒形の構成について述べる。

粒径が8mm以上の礫は、斑糲岩を主とし、白雲母黒雲母花崗岩が中、黒雲母花崗岩・変輝緑岩が僅か、アプライト質黒雲母花崗岩のごく僅か、閃緑岩・輝石安山岩・砂岩のごく僅かである。粒形は亜角を主とする。輝石安山岩は加工破片であり、人為的な混入物と考えられる。

粒径が4mm以上8mm未満の礫は黒雲母花崗岩・白雲母黒雲母花崗岩・斑糲岩・砂岩・変輝緑岩である。黒雲母花崗岩は灰白色、粒形が角、量が中である。白雲母黒雲母花崗岩は灰白色、粒形が角、量が僅かである。斑糲岩は暗灰色、粒形が亜角・亜円で量が多い。砂岩は茶褐色、粒形が円で、量のごく僅かである。変輝緑岩は暗灰色、粒形が角～亜角で、量のごく僅かである。

粒径が2mm以上4mm未満の礫は黒雲母花崗岩、斑糲岩、変輝緑岩、石英、長石である。黒雲母花崗岩は灰白色、粒形が角、量が多い。斑糲岩は暗灰色、粒形が角～亜角、量が多い。変輝緑石暗灰色、粒形が亜角～亜円、量のごく僅かである。石英は、無色透明、粒形が角、量のごく僅かである。長石は無色透明、粒形が角、量のごく僅かである。

粒径が16分の1mm以上2mm未満の砂は花崗岩、斑糲岩、変輝緑石、石英、長石、白雲母、黒雲母、角閃岩、輝石である。花崗岩は灰白色、粒形が角、量が僅かである。斑糲岩は暗灰色、粒形が角、量が僅かである。変輝緑石は暗灰色、粒形が亜角、量のごく僅かである。石英は灰白色、無色透明で、粒形が角、量が中である。長石は白色、無色透明で、粒形が角、量が僅かである。白雲母は無色透明、板状で、量のごく僅かである。黒雲母は金色、黒色、板状で、量が僅かである。角閃石は黒色、粒状で、粒形が角、量が僅かである。輝石は暗緑色、粒形が角、量のごく僅かである。

(5) 採石地について

脇本遺跡は、北方の山地から砂礫を供給する谷が東側にあり、南側には初瀬川が流れている。

谷の出会い付近では、山地を構成する斑糲岩、片麻状黒雲母岩、白雲母黒雲母花崗岩、黒雲母花崗岩、アプライト質黒雲母花崗岩の礫からなり、斑糲岩を主とする。粒形は亜円のものも見られるが、角～亜角を主とする。

初瀬川の川原では黒雲母花崗岩、アプライト質雲母花崗岩、閃緑石、斑糲岩、変輝緑石の礫に混じって、円礫のチャート、砂岩、流紋岩質溶結凝灰岩（室生火山岩）の礫がごく僅かにみられる。

整地土と推定される砂礫は初瀬川の砂礫に比べて、細粒の砂に角閃石、輝石が多く、チャートや流紋岩質溶結凝灰岩が認められない。また、斑糲岩の量が多く、白雲母黒雲母花崗岩も多い。角ばったものが多い。また、粒径が小さいものに砂岩が含まれることから、初瀬川の供給した砂礫が僅かに含まれる。

このようなことから、整地土の砂礫は東方を流れる谷から供給された砂礫を主とし、僅かに初瀬川の砂礫も混じるような場所で採取されたと推定される。このような条件は、河岸段丘上に谷からの砂礫が供給された場所、すなわち河岸段丘の上に形成された扇状地の砂礫が推定される。地形的には、斜面地を平坦にしていることから、当発掘地の北東付近の砂礫を移動されたと推定される。

第5章 脇本遺跡の位置付け

(1) はじめに

脇本遺跡の発掘調査についての報告は前章までに述べたが、ここでは発掘調査の目的であった磯城・磐余地方にあったであろう諸宮との関連性について少し踏み込んだ考察を行いたい。

593年、推古天皇が豊浦に宮を構えてから710年に元明天皇が平城京に遷都する間での100年余り、政治の中心は飛鳥、藤原の地にあった。『記・紀』には第10代の崇神から31代の用明までの天皇の中で、約半数が飛鳥から東北方にあたる三輪山周辺の磯城地方から、西方につづく磐余と呼ばれる地域に宮室を営んでいたことが記されている。

昭和9年(1934)に日本古文化研究所による藤原宮の調査を嚆矢として、昭和35年(1960)以降は飛鳥の正宮と藤原京(宮)の考古学的調査は継続して行われ、多くの成果を上げている。しかし磯城、磐余に存在していたであろう6世紀後半以前の宮室については、発掘を伴う具体的な調査は行われていなかった。そんな中、昭和57年(1982)から昭和58年(1983)にかけて、桜井市教育委員会が行った朝倉小学校の体育館およびプール建設にともなう発掘調査で、6世紀前半を中心とした石溝や柱穴遺構が検出された。

この調査を契機として、桜井市と橿原考古学研究所の合同で「磯城・磐余の諸宮調査会」(以下諸宮調査会)が結成され、この地域に存在していたと思われる飛鳥以前の宮室についての考古学的調査が始まった。

(2) 諸宮調査会以降の発掘

諸宮調査会の行った7次にわたる調査の詳細は、第3章で述べたが、その後、桜井市教育委員会による第8次、桜井市文化財協会が行った第9次の調査、橿原考古学研究所が行った第10次から第21次におよぶ調査が現在まで続いている。これらの調査においても多くの成果をあげているが、それらの成果も含めて、この一帯の古代における変遷を概観しておこう。

脇本遺跡の第10次以降の発掘調査は、国道165号線の拡張事業にともなうもので、その調査範囲は東西500mにおよんでいる。その結果、諸宮調査会が行った調査に加えて多くの資料が加えられることになった。そのなかでまず挙げられるのが、調査区全域で検出した弥生時代後期後葉から始まる竪穴建物群である。これは初瀬谷の出入り口部にあたるこの地域が、古代から重要な場所であったことを示している。諸宮調査会の調査結果では、竪穴建物群の存在期間に断絶があるとの理解であったが、それは古墳時代中期以降の建物群の中核部のことで、全体的には共存していたであろうことも明らかになった。

また5世紀後半から7世紀後半までの掘立柱建物群が、散在的ではあるがさらに広範囲に分布していることも判明した。中でも注目すべき遺構は、5世紀後半のSB1001・SB1002の建物が作られた高台の西に築かれた濠の存在である(図55・56)。全貌は明らかではないが、現地形から見ても建物群とつながる一連の遺構の可能性が強いが、出土した土器から見ても、この濠の成立時期が5世紀後半で

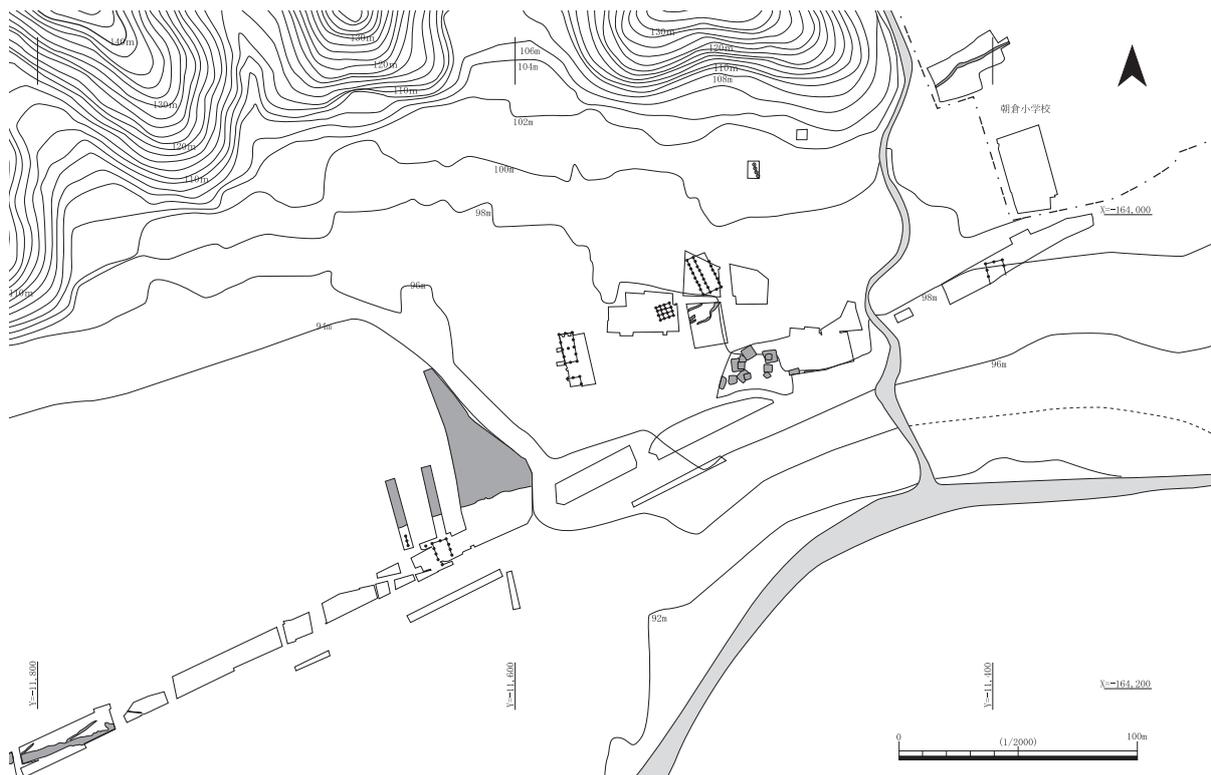


図55 古墳時代中期～後期の遺構（註1文献より）

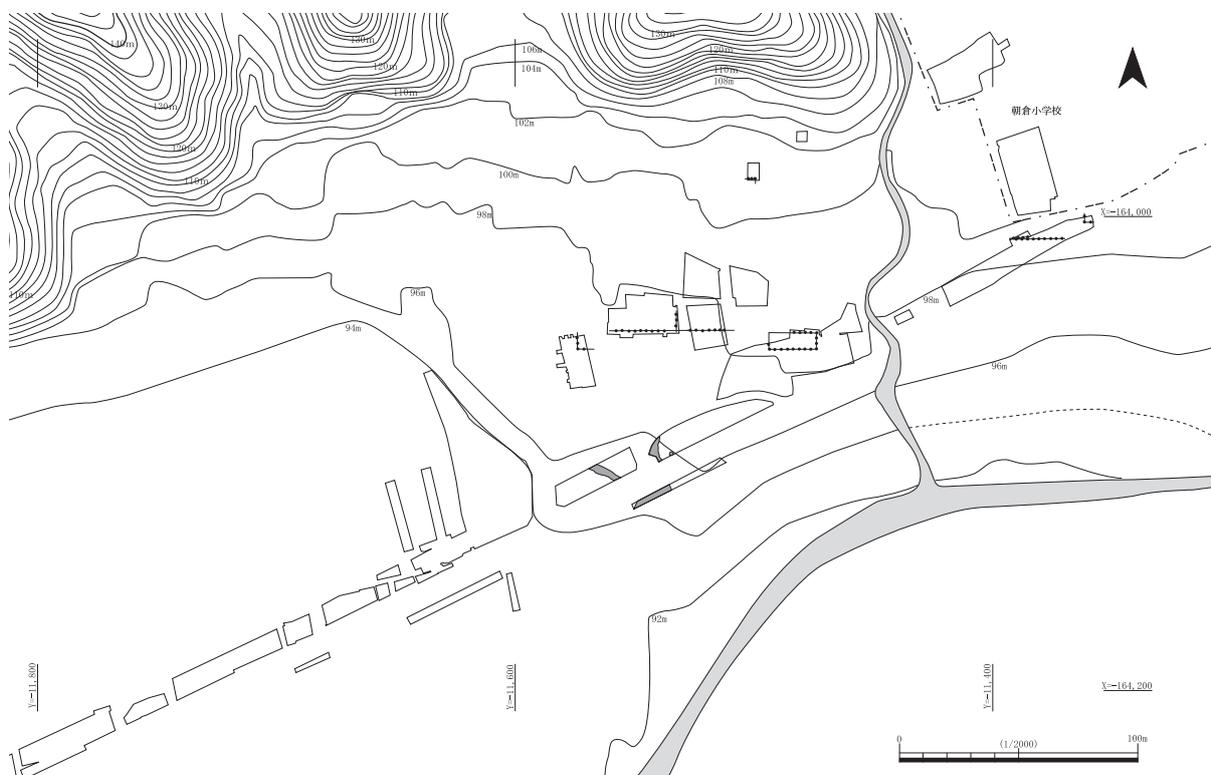


図56 飛鳥時代～奈良時代の遺構（註1文献より）

あること示している。初瀬川と三輪山に挟まれた狭い谷間に存在したこの遺構群の重要性を再認識させられることになった。

(3) 文献に見える泊瀬朝倉宮

ここでは雄略天皇の宮に関する記事と、間接的に宮の所在地を想起させるとされる文献について見てゆく。

先ず『古事記』では「大長谷若建命、長谷の朝倉宮に坐しまして、天の下治らしめき」とある。また志幾の大県主の家を見て、「奴や、己が家を天皇の御舎に似せて造れり」と批判する記事が見える。

『日本書紀』では大泊瀬幼武天皇、すなわち雄略天皇は「安康天皇の三年十一月十三日、壇を泊瀬の朝倉に設けて、即天皇位す。遂に宮を定む」とある。宮の構造に関しては、十一年冬十月十日に「天皇、木工關鷄御田に命じて、初めて楼閣を起りたまふ。」とあり、また二十三年の八月、天皇崩御の後に星川皇子が起こした反乱に際して、母親の吉備稚姫が言った以下の記述がある。「天下之位登らむとならば、先ず大蔵の官を取れ」。それに従った皇子は、大蔵の官を奪った後に外門を閉めたが、やがて焼き殺されることになった。

これらの記事から雄略天皇の宮は、泊瀬（長谷）朝倉に営まれたことがわかる。またこの宮は楼閣を持ち、外門を構えた大蔵が存在していたことがうかがえる。

間接的なものとしては、『日本書紀』雄略六年二月四日に、天皇が泊瀬の小野に遊び、山野の景色を見て詠んだ歌がある。

隠國の 泊瀬の山は 出で立ちの よろしき山 走り出の よろしき山の
隠國の 泊瀬の山は あやにうら麗し あやにうら麗し

(泊瀬の山は、家から出たところにすぐに見えるみごとな山である。家から走り出たところにすぐ見える美しい山で、泊瀬の山は何とも美しい。何とも言えず美しい)

また『万葉集』巻第一の巻頭の歌からも同様の情景がうかんでくる。

籠もよ み籠持ち ふくしもよ みぶくし持ち この岡に 菜摘ます兒
家聞かな 名告らさね そらみつ 大和の国は おしなべて 我こそ居れ
しきなべて 我こそいませ 我こそは 告らめ 家をも名をも

『古事記』にも雄略天皇がある時、美和河（三輪川）の畔で衣を洗っている美しい童女に出会った時の以下の話がある。「汝は誰が子ぞ」と問うと童女は「己が名は引田部の赤猪子ぞ」答えた。雄略は彼女に早晩に呼ぶことにするから嫁がせないようにとの約束をしながら、八十年も待たせた、という話である。

また雄略が葛城山で狐をした帰り、一言主神が長谷の山口まで送ってくれたという話。

これらの史料はいずれも泊瀬（長谷）朝倉宮の所在地を彷彿させるもので、その場所が脇本遺跡である可能性を示唆している。

(4) 稲荷山古墳出土鉄剣銘文に見える斯鬼宮

埼玉県行田市の埼玉古墳群の中にある前方後円墳、稲荷山古墳から出土した銘文が金象嵌された鉄剣のニュースは当時大きな話題になった。発掘調査から10年ほど経った昭和53年(1978)のことだった。²⁾その中に「獲加多支鹵大王寺在斯鬼宮」という一文がある。「ワカタケル大王(雄略天皇)の宮が磯城に在った時」ということだが、ここで寺というのは古代中国での用法で、役所もしくは宮を意味している。斯鬼は磯城のことと見て良く、泊瀬朝倉宮は磯城に含まれていることから、斯鬼宮を朝倉宮とすることに矛盾はない。和田萃氏の研究によると、延久3年(1070)に作成された「興福寺大和國雑役免坪付帳」に城島荘という荘園が記されており、その記載によると城島荘の東半部の中心が、脇本の春日神社あたりになるという。³⁾つまり11世紀後半にもまだこの一帯を「シキシマ」と称していたのである。このことは6世紀代の欽明天皇の磯城島金刺宮、さらには行宮の泊瀬柴垣宮の位置を考える上でも重要な示唆を与えてくれる。

稲荷山古墳の鉄剣銘文の書き出しは「辛亥年」で始まるが、現在考古学研究者とほとんどの古代史研究者は、この年を471年に当てている。伴出した遺物をもとにしているが、『宋書』倭国伝に記された倭王武、すなわち雄略天皇が宋の順帝に宛てた上表文が478年であることとも矛盾しない。つまり雄略天皇5は世紀後半から6世紀初頭まで、泊瀬朝倉宮に宮室を営んでいたのである。

(5) 脇本遺跡は朝倉宮か

諸宮調査会の調査を遡ること十年余り前の、昭和48年(1973)から昭和50年(1975)にかけて、脇本遺跡の南にある外鎌山(忍坂山)の北麓に分布する古墳群の発掘調査を行った。団地造成のための山麓の62haが開発されたが、そこには約40基の古墳が分布していた。多くは6世紀以降の後期、終末期の古墳だったが、わずかではあったが4～5世紀の土器を副葬した小型古墳も含まれていた。

調査後、発掘調査報告書を作るため周辺の歴史環境を調べている過程で、朝倉小学校にかつて脇本遺跡から出土した土器が保管されていることを知った。私たちは、脇本遺跡と外鎌山古墳群との間に関係があるのではなかろうか、との期待を抱きながら小学校の遺物の調査を行い、報告書にも掲載したが、まだ納得のいく解釈は出来ていない。

しかし、その後実際にこの遺跡の調査を担当することになり、因縁のようなものを感じた。

戦前のことだが、近畿日本鉄道(近鉄)が朝倉駅を新設した昭和19年(1944)に、大量の遺物が出土していたことを報じた新聞記事があることを、地元で長く研究されている松本俊吉氏から教えていただいた。大阪朝日新聞の昭和19年(1944)10月14日付けの以下の記事である。

「石葺きの一部か——朝倉駅新設地で出土」

「近畿日本鉄道桜井、長谷寺両駅の間にも新設される『朝倉駅』は地元磯城郡朝倉村民、学童、鳥見山青年学校生徒らの勤労奉仕で着々と進捗を見ているが、作業現場の同村慈恩寺字ヤゲン領山畑の地下五尺から、弥生式末期の壺をはじめ祝部式の食器皿、壺、土師器の高杯、壺などの各片が夥しく出土したほか、石葺きらしいものの一部が発見され学界の注目を集めている。」

と記され、同紙の11月1日にも以下の記事が掲載されている。

「土師器の壺——朝倉駅工事現場から」

「磯城郡朝倉村慈恩寺領の近畿日本鉄道『朝倉駅』新設工事現場から、さきに弥生、祝部、土師器の各破片および石葺きらしいものの一部が発見され、学界の注目をあびていたが、こんど更に口径約六寸、深さ一尺五寸、ヘラ書き文様のある珍しい土師器の壺が出土した。」

現在朝倉駅は初瀬川左岸のやや微高地にあり、面積はさほど広くはないものの、眺望の良い立地にある。弥生土器はともかく、祝部土器（須恵器）、石葺きの存在は気がかりである。

諸宮調査会が行った調査区で雄略期と見られる遺構は、第1・2次調査区の二棟の南北棟（SB1001・SB1002）と第6次調査区のSB6001とSB6002の一部に過ぎないが、第12次調査区のSB12004、第15次調査区のSB15006などでも同時期と見られる南北棟が確認されている。さらに大規模な濠状遺構の存在なども考慮すると、この時期の遺構は東西約300m、南北は初瀬川辺までを含む約250mの範囲の中に散在していた可能性が考えられる。ただその中枢部は、諸宮調査会が行った春日神社および脇本の集落あたりと見るのが妥当だろう。

また外鎌山古墳群の調査中に疑問に思っていたことがある。それは初瀬谷になぜ古墳が存在しないのだろうか、ということだった。一般に後期古墳は尾根の上や、丘陵の南斜面に築かれることが多く、特に古墳の多い桜井地方では、そのような条件にかなうところには必ずと言って良いほど小規模な古墳が分布している。初瀬谷には三輪山から南に向かって多くの尾根が延びていて、古墳を築くには適した環境にありながら、全く見られない。それに対して谷の南には、条件の良くない北に延びる尾根上にも点在する古墳がある。

一般的な解釈では、三輪山が神聖な山であることから、死＝穢れの観念から近くに古墳を築かなかつたのではとされるが、三輪山の西麓にも後期古墳は点在していることから、厳密にはその論は成り立たない。

私は、5世紀後半にこの地に宮が造営されたことを契機として、一帯に古墳の築造が規制されたのではなかろうかと考えている。つまり古墳が存在しないということから、かえってこの地の重要性が指摘できるのである。

第4次調査区のSB4001、第6次調査区のSB6004など主軸を北から西に約20°振る建物群、さらに第5次調査区の石溝、石垣などの遺構は、欽明天皇の磯城島金刺宮、同じく欽明天皇の行宮の初瀬柴垣宮なども可能性の枠内に入れておくべきだろう。

7世紀後半のSA3001、SB2001、SA15001、SB17020の東西柵列や東西棟は、『日本書紀』天武天皇二年（674）四月十四日の条に、「大来皇女を天照大神宮に仕えさせるために、泊瀬齋宮に住ませた。ここは清めて次第に神に近づくところである」との記述があり、さらに一年後の天武三年十月九日条に「大来皇女、泊瀬の齋宮から伊勢神宮に向かった」などの記事に対応する可能性が考えられる。

伊勢の齊王に任命された大来皇女は、一年半にわたって泊瀬の齋宮で潔齋を行ったが、その施設の一端の可能性もあろう。同じく天武天皇八年（680）八月十一日の記事に、「(天皇が)行幸して、迹驚淵（とどろきのふち）で宴を行った」と見える。脇本遺跡の南を東西に流れる初瀬川の一画に「迹驚

淵」との伝えの残る場所がある。この時期の遺構群を、天武天皇の行宮とする見方も可能性として残しておくべきであろう。

脇本遺跡から西方を遠望すると、三輪山の南西麓に広がる慈恩寺の集落と鳥見山との間には、初期大和政権の大王墓の一つと見られる桜井茶臼山古墳を望むことができ、さらに遙か彼方には金剛、葛城の山並みが望める。二つの山の間をぬって南河内へと通じる水越峠辺りも視野の中にある。

この峠を東に下ったところに鎮座するのが、葛城一言主神社がある。そこで思い浮かぶのが、『記・紀』に記された葛城一言神と雄略天皇の出会いの話である。これは当時の大王勢力に対峙する形で葛城地方に基盤を持っていた権力者との出会いを寓話化したのだろうが。この地に立って見ると、その物語がより具体的な形で迫ってくるのである。

弥生時代以来、東国への出入り口として重視されていたこの地域が、5世紀後半になって大きく姿を変え、政権にとって重要な拠点として、数世紀にわたって機能したことを遺構群は物語っているが、その先駆けが雄略天皇の泊瀬朝倉宮であったと考えられる。 (前園)

【註記】

- 1) 奈良県立橿原考古学研究所編 2011『脇本遺跡Ⅰ』
奈良県立橿原考古学研究所編 2014『脇本遺跡Ⅱ』
奈良県立橿原考古学研究所編 2015『脇本遺跡Ⅲ』
- 2) 埼玉県教育委員会編 1980『埼玉稲荷山古墳』
- 3) 和田 萃 1992『大系日本の歴史 (2) 古墳の時代』小学館

あとがき

昭和56年（1981）～57年（1982）にかけて、桜井市教育委員会が行った朝倉小学校庭内の発掘調査を契機として、桜井市、檀原考古学研究所が中心となり磯城・磐余の諸宮調査会が結成された。そして飛鳥時代以降の諸宮の調査が進展し、新たな成果が挙げられるなかで、それ以前の宮室が存在していたであろう磯城・磐余地域の考古学による調査が開始された。

現地踏査と既往の調査成果から、協本地区を最初の調査地として選び、昭和59年（1984）から平成元年（1989）にかけて、7次におよぶ調査が実施された。

その成果は本書に記されているが、報告書の完成までに長時間を要したことは、途中で報告書の構成の変更が生じたと言うことはあったが、編者の責任であることは明白で、ここで深謝させていただきたい。

その後、檀原考古学研究所、桜井市教育委員会などによる調査は継続し、協本遺跡の実態がさらに明らかになり、その歴史的価値の重要性が高まっていることは、当初の調査会の趣旨が実を結びつつあることを示していると言えよう。今後の調査研究で、遺跡の具体的な姿が解明されることを願っている。

前園 実知雄

写真図版



遺跡遠景（西上空より）



第4次調査の検出遺構（上が東）



体育館建設予定地の調査区南半（東より）



体育館建設予定地の調査区 石溝SD1001（北より）



体育館建設予定地内の調査区 石溝SD1001（東より）



体育館建設予定地内の調査区 石溝SD1001（西より）



体育館建設予定地内 石溝SD1001（西より）



体育館建設予定地内 石溝SD1001調査区東端（西より）